

**孤独・孤立対策に関する  
地域連携推進モデル調査研究業務  
(東海、近畿、中国・四国 2 地域)**

**報告書**

**令和7年3月**

**株式会社 野村総合研究所**

# 孤独・孤立対策に関する地域連携推進モデル調査研究業務

## (東海、近畿、中国・四国 2 地域)

### 報告書

#### 目次

第1章 調査研究事業の概要	1
1-1. 調査研究事業の概要	1
1-2. 調査研究事業の目的	1
1-3. 調査研究事業の実施体制	2
1-4. 調査研究事業の詳細（各自治体の活動で得られたこと）	3
1) 官民連携 PF の組成	3
2) 試行的事業の実施	3
3) 各自治体が官民連携 PF に取り組む上での留意点・示唆集の作成	5
1-5. 本報告書の構成	9
1-6. 仕様書と本報告書の関係	9
第2章 事例集	10
2-1. 京都市	10
2-2. 岡崎市	31
2-3. 春日井市	54
2-4. 豊田市	エラー! ブックマークが定義されていません。
2-5. 播磨町	エラー! ブックマークが定義されていません。
2-6. 鳥取市	エラー! ブックマークが定義されていません。
2-7. 宇和島市	エラー! ブックマークが定義されていません。
第3章 留意点等示唆集	エラー! ブックマークが定義されていません。
3-1. 連携PFの行程および実務上の留意点	エラー! ブックマークが定義されていません。
3-2. はじめて取り組む際のポイント	エラー! ブックマークが定義されていません。

## 第1章 調査研究事業の概要

### 1-1. 調査研究事業の概要

わが国では、長引く新型コロナウイルス感染症の影響に伴い、自殺者数、DV 相談件数への影響にも見られるように、孤独・孤立の問題の顕在化、深刻化が進んでいる。さらに今後、物価高騰の影響も加わって、生活困窮等に関する不安や悩みを抱える者、悩みが深刻化する者が増加する恐れがあり、孤独・孤立に悩む者に対するきめ細やかな対応の強化が喫緊の課題となっている。

令和5年に孤独・孤立対策推進法が成立し、令和6年4月1日から施行され、地方公共団体における努力義務が規定され、国全体での孤独・孤立対策が推進されている。今後、支援を必要な方々に、よりスムーズに各種の支援策が届くようにするためには、地方公共団体が主体となって、NPO 等関係団体との連携を進めていくことが求められている。

### 1-2. 調査研究事業の目的

以上を踏まえ、本業務は、直近の孤独・孤立対策に係る調査結果や、令和4年4月にとりまとめられた「原油価格・物価高騰等総合緊急対策」、令和6年4月に施行された孤独・孤立対策推進法を踏まえ、孤独・孤立に悩む方々に各種の支援策がより着実に届くよう、住民に身近な存在である地方公共団体やNPO 等関係団体の連携強化を緊急に行い、地方公共団体における孤独・孤立対策の充実を目的として実施するものである。

具体的には、孤独・孤立の問題に対応するため、地方公共団体等において、官・民・NPO 等の関係者による地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム（以下、「連携PF」という。）の形成を前提として、孤独・孤立対策の充実に取り組む活動を側面から支援するとともに、それらによる連携PFの形成に向けた取組過程について調査・分析を行い、全国の地方公共団体に共有する調査研究事業を実施するものである。各自治体において求められる連携PFの絵姿や取組は、各自治体の地域性、社会実態、取り組み状況（今年度から取組を開始、過年度より取組を継続）等に応じて異なることから、それら要素を総合的に俯瞰しつつ、目的に整合した取組となる側面支援が必要である。

官民を超えた連携の構築に当たっては、当初は連携PFを主導するのは行政であるものの、NPO 等団体が従前から行ってきた社会課題への取組や支援は行政が学ぶべきものであることや、社会課題に取り組むうえでは官民の垣根を超えた協力体制を構築する必要があることから、参画する関係者が対等に相互につながる「水平的連携」を目指す。ついては、連携PFの構成団体が共通の立ち位置での検討を可能とするために、各団体からみた問題認識を共有し、共に対応すべき課題を設定の上、その解決のために各団体が何をできるか、といった視点が重要である。連携PFの構成団体は、本業の中で孤独・孤立に係る取組を行っていることも多く、個々の取組の中で既に価値提供を実現している場合もある。よって、本連携PFにおける取組においては、それら団体がつながることによってどのような新しい価値を創出できるか、といった観点から連携要素を導出する。具体的には、各団体における取組の課題や、活用可能なリソースを踏まえ「情報をつなぐ」「ノウハウを共有する」「協働する」といった観点から各団体の機能補完や、連携による新しい取組をつくり出す余地について検討することが重要である。

### 1-3. 調査研究事業の実施体制

本業務に求められる専門性を有するコンサルタントによって検討チームを組成した。特に主たる業務従業者の多くが「地方公共団体を対象としたモデル事業への支援業務」の経験を有しており、地方公共団体への計画策定を含めた伴走支援やPMO支援といった本業務と類似する知見・経験を豊富に持つ。孤独・孤立について独自研究を行っているメンバーも体制に含み、本業務を効果的に進めることが可能な体制でプロジェクトチームを構成した。

加えて、弊社は「関東、中国・四国1、九州地域」も受注しているため、両案件を統轄する業務責任者を置いて情報共有等を効果的に行う体制を組成した上で、それぞれの案件のとりまとめを行う担当技術者（リーダー）を設置した。その担当技術者（リーダー）のもと、自治体ごとに主担当を設定して各自治体の伴走支援を行った。

また、本調査研究においては、各自治体における孤独・孤立対策を前に進めるための試行的事業の発注を行うこととなっており、それら発注や精算に向けた事務手続きを着実に遂行する必要がある。よって、経理業務については、経験豊富な監査法人と必要に応じて連携し、効率的に対処できる体制を敷いた。

## 1-4. 調査研究事業の詳細(各自治体の活動で得られたこと)

### 1)官民連携 PF の組成

今年度より新たに孤独・孤立官民連携 PF 推進事業に取り組む自治体においては、その目的、構成団体、取組内容等について検討が必要であったが、自治体の問題認識や社会実態等に応じた検討を通じて、関連する支援団体等へのアプローチを行い、孤独・孤立対策における取組課題について検討を開始した。

本調査研究業務を開始した時点で既に連携 PF が組成されていた自治体もあったが、その場合はより具体的な課題認識の共有を通じて、既存の取組や仕組みの高度化、PF の拡大に向けた検討を行った。

### 2)試行的事業の実施

各自治体において、孤独・孤立対策を着実に前進させるための試行的事業の企画、発注を行った。企画においては、目指すべき孤独・孤立対策のゴールに対し、当該自治体が果たすべき役割を踏まえ、企画を行い、着実な検討と進捗管理を行った。

現状の各自治体における「試行的事業」の内容をマッピングしたところ、市町村、政令市とステータスが異なっても、実態調査、広報活動、人材育成等、幅広い取組が進められようとしている。一方で、協議体としての取組は始まったばかり、もしくは今後初めていくところもあるため、引き続き支援団体や要支援者が抱えている課題や、支援ニーズの把握を通じて、連携 PF としての仕組みの高度化が必要。現状の取組を継続させるとともに、支援団体・要支援者等のニーズ把握を通じて、連携 PF としての仕組みの高度化が求められる。

図表 各自治体における試行的事業の整理マップ  
(東海、近畿、中国・四国 2 地域)

自治体	連携PF	地域協議会	知る	企てる	つくる・つなげる・つたえる	
			R:Research 地域ニーズ・ニーズ把握	P:Plan 合意形成 計画・構想策定 体制組成	D:Do 支援提供 広報・周知	
8 京都市	令和4年	令和6年	・実態調査 ・支援団体向け調査	・支援団体がつながる仕組みの確立		・大学生の巻き込み ・ステッカーの製作
9 岡崎市	令和6年	未	・岡崎モデルの検討	・PF設立フォーラム ・ポッドキャストと交流会		・ポッドキャストの広報活動 ・アイコンの制作
10 春日井市	令和5年	未		・PF拡大を目指した地域アセスメントの実施	・つながりサポーター養成講座の開催	・生活動線上でのリーフレット配布 ・つながりづくりを推進するイベント ・「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」の作製 ・シンポジウムの開催
11 豊田市	令和6年	未	・周知啓発のためのツール(カードゲーム)企画・制作	・「つながるCredo」の市内配布・周知		・カードゲームを用いた周知啓発イベント ・周知啓発チラシの作成 ・「豊田市テイス」への記事投稿
12 播磨町	令和7年	令和6年	・シンポジウムと支援者向け研修	・地域協議会の設置 ・精神科病院との連携 ・PF立ち上げ事前研修 ・既存支援体制の可視化	・精神科病院との連携	・住民向け広報 ・シンポジウムと支援者向け研修 ・中学3年生に対する「社会保険を学ぶ授業」 ・居場所マップ・動画の作成
13 鳥取市	令和4年 (広域は令和6年)	未	・PFメンバーの視察研修	・支援職つながり交流会、つながりミーティング ・PFの開催	・つながりサポーター養成講座各種	・取組のブランディング広報
14 宇和島市	令和4年	令和6年		・食支援によるアウトリーチ体制強化事業	・食支援によるアウトリーチ手法の確立	・居住支援ノベルティ製作

図表 (参考) 今年度別チームの自治体における試行的事業の整理マップ  
(関東、中国・四国1、九州地域)

自治体	連携PF	地域協議会	知る	企てる	つくる・つなげる・つたえる
			R:Research 地域ニーズ・シズ把握	P:Plan 合意形成 計画・構想策定 体制組成	D:Do 支援提供
1 福岡市	令和5年	未	・実態把握調査		・お悩みハンドブック ・エプロン製作
2 熊本市	令和4年	令和7年	・市内民間団体向けリソース調査(活動実態調査)	・PFの拡大・強化に関する議論 ・地域協議会設置に向けた議論・準備	・PF会議+つながりサポーター養成講座の開催 ・相談先リーフレットの作成(更新) ・新聞広告の作成
3 市原市	令和6年	令和6年		・孤独・孤立対策PF会議 ・PF会議の作業部会	・福祉関係者合同研修会 ・ゆるサボ®研修 ・企画提案型研修委託事業(こども未来キャラバン)
4 中野区	令和8年(予定)	令和8年(予定)	・孤独・孤立に関する意識調査・ヤングケアラー実態調査		・孤独・孤立フォーラムの開催 ・動画制作
5 座間市	未	未	・リソース調査・地域資源マップの作成		・アート事業
6 呉市	令和7年	令和7年	・実態調査		・講演会 ・パネル展
7 福山市	令和7年	未	・実態調査 ・リソース調査		・つながりサポーター養成講座 ・市民向け勉強会

### 3)各自治体が官民連携 PF に取り組む上での留意点・示唆集の作成

次年度以降、他の自治体が孤独・孤立対策に取り組む上で留意すべき事項を示唆集として取りまとめた。特に、連携 PF の組成については、これまで同様の取組をしたことのない自治体にとってはどのような手順や、工夫により検討を進めたらよいか、その指針となるものが必要となる。今年度、側面支援を行った自治体と、連携 PF 形成に向けた検討や、過去の取組の経緯について議論、ヒアリングする中で、連携 PF 形成に向けてどのような課題や工夫があったのかを把握することができた。それらを PF 形成フェーズと、課題の 카테고리 ごとに整理することで、今後、他の自治体にとって参考となるよう取りまとめた。

詳細は第 3 章で記述するが、連携 PF の形成フェーズ、および課題ごとに各自治体の取組を整理したところ、大きな取組の方向性と示唆として以下が抽出された。

#### (ア) 初期段階

##### ① 主担当部署・主担当者の設定

- ・ 孤独・孤立対策は福祉政策の側面が強いため、これまでの重層、生活困窮者支援などを担ってきた福祉部局が担当
- ・ 孤独・孤立対策は、庁内各課での連携が重要であり、庁内他部署につなぐ経験が豊富な部署、コアとなる部署が担当
- ・ 地域とのつながりがあり、地域の現状をよく理解した部署が担当
- ・ 制度の狭間にいる方を支援する福祉総務課が担当
- ・ 庁内外ともに、「被災者支援」の文脈から派生し、孤独・孤立対策の重要性を感じた関係者・団体が取り組みを主導

##### ② 担当者の初動

- ・ まずはやってみる、考えながら推進していく
- ・ 国の動き、他の自治体の取組事例、市内の事例等の情報収集からスタート
- ・ 孤独・孤立の定義、PF のイメージについて庁内で共有・確認
- ・ ゼロからはじめない、既存の取組を孤独・孤立対策の観点で解決していく
- ・ 現実的な支援計画を立てるために、まずは社会資源の洗い出しを行った
- ・ 問題意識を民間団体と共有
- ・ 担当者の問題意識を定量化・資料化した上で、庁内で粘り強く説明
- ・ 早い段階から 4 市での合同会議を開催し、認識合わせを実施
- ・ 広域での合意形成ために関係者に順番に話を展開

#### (イ) 準備段階

##### ③ 地域の現状把握

- ・ 既存のアンケート調査等で問題の根拠となるデータを得ていた
- ・ 住民の孤独・孤立に係る実態を把握するためのアンケート調査を実施した
- ・ 支援団体への調査でニーズや課題、リソース調査で支援団体の活動内容の把握
- ・ 中間支援団体と連携し、地域の現状を把握

- ・ 庁内を対象にリサーチをかけ、情報収集、情報共有を図る
  - ・ 有識者と調査手法を相談し、連携したフィールドワークを実施
  - ・ 相談窓口を通じた問い合わせを通じて支援ニーズを把握
  - ・ 広域連携にむけて、各地域の要望を訪問して聞き取り
- ④ ー1 取組テーマ決定
- ・ PFの構成団体のニーズを聞き取り、取組テーマとした
  - ・ 中間支援団体と議論し、取組テーマを決定
  - ・ 特定の分野に限定せず、全体を対象とすることとした
  - ・ 参加主体に重複はあるものの、連携PFと重層との役割分担を整理
  - ・ 試行的事業のメニューを先に決め、後からPFのテーマを議論するという順序で行った
  - ・ 実態把握調査で課題意識の大きかったテーマに焦点を充てた
  - ・ 過年度の類似事業でカバーできていなかった領域（食支援、居住支援）を孤独・孤立対策の一環でカバー
  - ・ PFを「社会課題を可視化見える化・共有化し、みんなで解決する場」とする
  - ・ アート事業のコンテンツを各市の意見を元に決定
  - ・ 地域に根差した複数のPFを構築するために、地域の課題に根差したテーマを設定
- ④ ー2 連携PFの企画・設計
- 体制
- ・ 既存の合議体や体制をベースとすることで、重複感・負荷の軽減や一体的な情報共有が可能な体制の構築を目指す
  - ・ 共通の地域特性をもつ地域単位でのPFの立ち上げを検討
  - ・ 特定の支援対象者像・住民属性に焦点を当てた団体で体制を組む
  - ・ 中間支援団体などの関係団体に広く呼びかけ、PF会議を構成した
  - ・ 地域課題を整理し、新しいテーマへの拡大を図った
- 活動内容
- ・ 参加団体のニーズに合わせた活動を推進していく
  - ・ 支援団体同士のつながりづくりをメインの活動に位置付ける
  - ・ 居場所づくり、まちづくりを考える場とする
  - ・ 広報・情報提供・情報共有を主軸とした活動を実施し、支援情報を一元的に発信するなど支援情報や活動の可視化を進める
- ⑤ 関係団体のリストアップ初期メンバーへの声掛け
- 庁内の巻き込み（検討方法）
- ・ 幅広い分野が関わることを前提に全庁など幅広く声かけを実施
  - ・ 支援対象・テーマを受けて、関係が深く対応機能を有する部署に声掛け
  - ・ 既存の合議体をベースに、不足する分野のメンバーに声掛け
  - ・ 孤独・孤立の入り口となる可能性のある関係課、窓口を持つ関係課への声掛け
- 庁内の巻き込み（巻き込み方法）
- ・ 法整備や努力義務化を後ろ盾に庁内連携を推進

- ・ トップが関わることでスムーズな連携を推進
- ・ 理念的な庁内連携だけではなく、具体的な事業ベースで協働の働きかけを実施
- ・ 庁内の関係課に情報をインプットし、共通認識の醸成、共感を得た
- ・ 日常的なコミュニケーション、相互に協力する関係性を構築している
- ・ 「お悩みハンドブック」を通じて、庁内に存在する関連支援制度の洗い出しと所管部署との関係構築を実施
- ・ 過年度事業を通じて、庁内巻き込みのために座談会などを開催
- ・ 広域での PF の構築にむけては段階を踏んで広域で取り組む合意形成を図った
- 庁外の巻き込み（検討方法）
  - ・ 庁内の各部署と過去に連携経験・信頼関係があることを重視して検討、日ごろ関係する団体には随時情報をインプットする
  - ・ 「地域のために何かしたい」と感じている活動者や市民を、今後も積極的に孤独・孤立対策に巻き込んでいく
- 庁外の巻き込み（巻き込み方法）
  - ・ キーパーソンを活用し、紹介をベースとした巻き込みを実施
  - ・ 既存の会議体を活用し、声掛けを実施
  - ・ リソース調査を活用し、声がけする団体を把握など、調査や情報発信をきっかけとした声
  - ・ 講座・勉強会の開催によって、参加者を中心に関係者を拡大
  - ・ 具体的な連携スキームとして、包括連携協定と共同事業等の枠組みを用意
  - ・ 連携 PF を表立った形とすることで参画したいという要望を受け団体数が徐々に拡大
  - ・ “誰から声掛けをするか”、“どのような順番で声掛けするか”も相手がスムーズに受け入れられるようにアレンジしていく

#### (ウ) 設立段階

##### ⑥ 域内住民・団体への情報発信

- 広報活動
  - ・ メディア MIX での広報で集中的に広報を実施
  - ・ 紙媒体の配布方法では、広報紙での大規模配布や孤独・孤立の入り口になりうるタイミングでアプローチするなど、配布方法、伝達方法を工夫
  - ・ 内容を読みたくなる構成や、相談しやすいメッセージ、受け取りたくなるシールなど配布物の内容を工夫
  - ・ いつでもだれでも気軽にアクセスできるポッドキャストを活用
  - ・ 中野区を拠点とするアニメ制作会社と協力し、ヤングケアラー当事者の周囲の子供たちに向けた、啓発アニメを制作
  - ・ 広報物を作る段階でも、大学生を巻き込むことで周知啓発を実施
  - ・ 民間デザイン力が活かされた HP を共同運用する形で情報発信を実施
  - ・ 孤独・孤立対策に関する若者の活動を紹介するフォーラムを開催した

- ・ 「楽しく自然に知ってもらおう」というカードゲームを活用した新しい広報を実施
- イベントの開催
  - ・ 新しいツールの説明会を開催し、その場で支援団体同士のつながりづくりを実施
  - ・ 開催場所の工夫により、誰でも立ち寄れる居場所をつくるイベントを定期開催
  - ・ 市民向けのおまつりイベントを開催し、市民への周知啓発、つながりづくりを実施
  - ・ 地域住民の経験談や当事者の声をベースに普及・啓発活動を実施した
  - ・ シンポジウムや講習会の開催により、孤独・孤立の取組を市民向けに周知

#### ⑦ 連携 PF の運営

- ・ 自治体は主に会合の開催を担い、参加者の課題の把握、ニーズのある活動を把握し、推進する
- ・ PF の「要領」を作成するなどして、PF として目的意識や連携する意義について共通認識を醸成
- ・ 当初は自治体が主導し、他地域への横展開にむけたノウハウの獲得等を実施
- ・ 2層構成の PF を運営しながら、支援団体同士のつながりを促進する
- ・ 会議体ではない形として、ホームページ上での情報連携と交流の場づくりを実施
- ・ PF 内外の関係者がテーマ設定から課題解決まで行う作業部会の開催を行う
- ・ リソース調査において PF 構築に前向きな団体へ声掛けしながら、県と連携
- ・ 広域連携では、各地のニーズに合わせて、各地で開催することも重要

#### (エ) 自走段階

#### ⑧ 地域協議会の設置

- ・ 複数分野に跨ったケース等、個別協議会から零れ落ちるケースの受け皿として位置付け、「誰ひとり取り残されないまち」を実現する
- ・ 相談支援包括化推進会議において地域協議会の役割を担う
- ・ 地域協議会を「知見交換の場」と位置づける。さらに「作業部会」を設け、個別ケースの対応方針を協議・決定する場を機能させていく予定
- ・ 重層的支援体制整備における支援会議が地域協議会の役割を担う

#### ⑨ PF の拡大・活性化

- ・ 持続可能性を考えた、今後の PF の運営主体の検討
- ・ 関係者の継続的な巻き込み、拡大
- ・ 連携 PF の支援団体との連携強化、形骸化防止
- ・ 域内全体での取り組みの活性化にむけて、市民の巻き込み・周知を推進する
- ・ スポーツ、教育など福祉以外のテーマを取り入れた PF 構築・拡大を目指す
- ・ 当事者の生活圏を考慮した連携ができる PF の構築を目指す
- ・ 地区別の PF を水平展開していく

## 1-5. 本報告書の構成

本報告書は、以下の構成・概要による。

## 1-6. 仕様書と本報告書の関係

仕様書と本報告書の関係は下表の通りである。基本的に、報告書の項目は、仕様書の各項目に対応して記述している。

仕様書項目		本報告書項目
① 地方自治体等の現状を踏まえた作業計画の策定・運営管理	⇒	第2章 事例集 「5. 自治体等との打合せ記録一覧」
② 地方自治体等における孤独・孤立の問題の現状分析	⇒	第2章 事例集 「1. 取組の全体像」
③ 連携PFの形成に向けた取組案の作成	⇒	第2章 事例集 「2. 連携PFイメージ」
④ 連携PFの行程及び実務上の留意点の調査・分析	⇒	第2章 事例集 「4. 連携PFの行程および実務上の留意点」、「コラム ～地方の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携PFの重要性～」 第3章 留意点等示唆集
⑤ 孤独・孤立対策の試行的事業の実施と効果検証	⇒	第2章 事例集 「3. 試行的事業一覧」

## 第2章 事例集

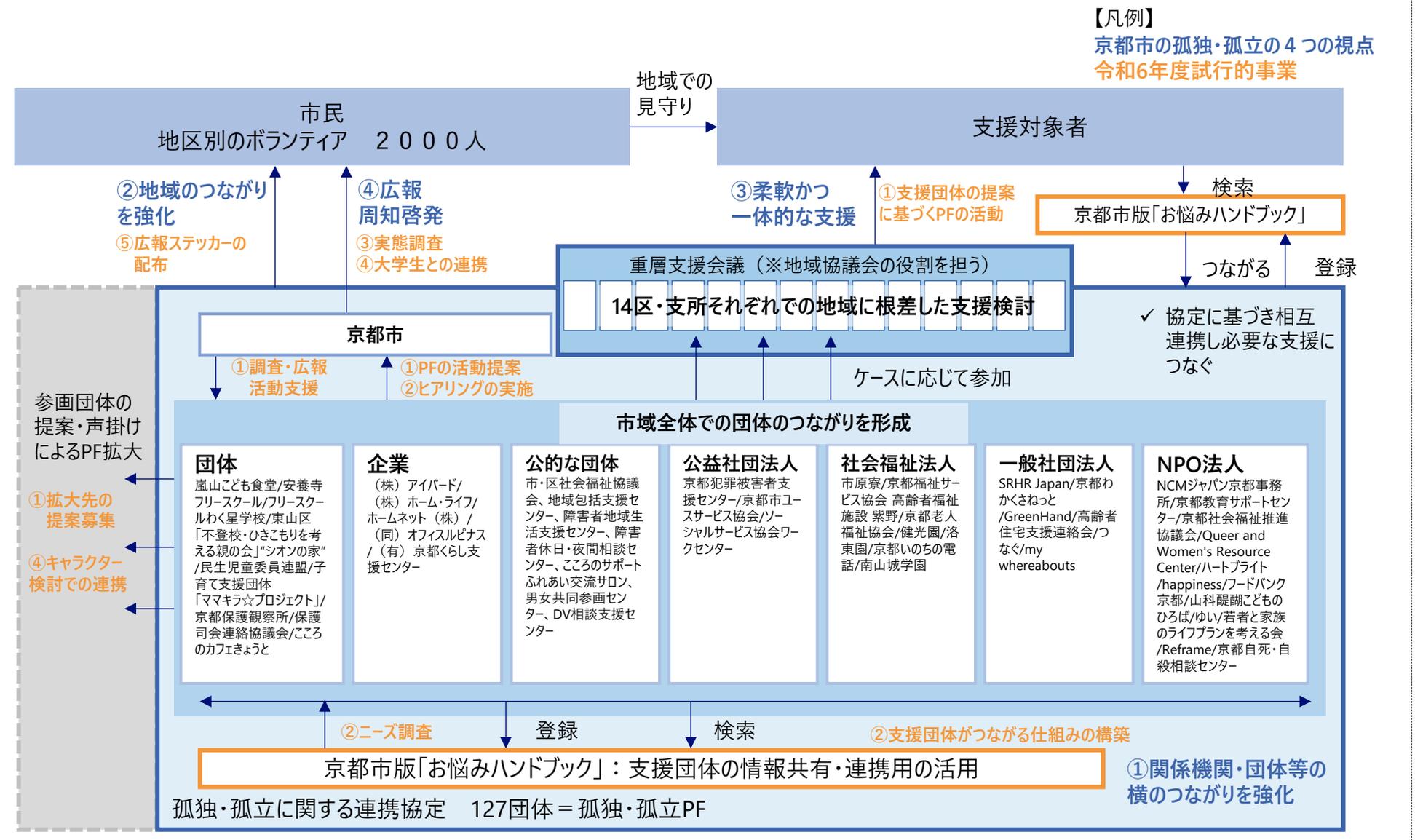
### 2-1. 京都市

No. 1		京都市	
<b>1. 取組の全体像</b>			
<b>1. 自治体の概要</b>			
①	自治体名	京都市	② 担当部局名 保健福祉局 健康長寿のまち・京都推進室 健康長寿企画課
③	人口	1,463,723(人) <令和2年10月/国勢調査>	
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)	保健福祉局 健康長寿のまち・京都推進室 健康長寿企画課
		庁内連携内 ※会議体、情報共有	・孤独・孤立対策の取りまとめ、孤独・孤立対策庁内連絡会議の主催 等
		庁内連携部局(メンバー)	子ども若者はぐくみ局、文化市民局、教育委員会事務局、環境政策局、保健福祉局、都市計画局、消防局
		庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・孤独・孤立対策庁内連絡会議(年1~2回程度開催)において適宜情報共有等を行う中で、孤独・孤立の問題への認識を深め、支援策の効果検証や新たな問題への対応等を進めている。
<b>2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿</b>			
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市では、令和3年4月、保健福祉局をチームリーダー、関係各局を構成員とした「孤独・孤立対策プロジェクトチーム」を設置し、これまで個々の課題に応じて、丁寧かつきめ細やかに実施してきた取組の融合、更なる充実・強化を図るとともに、近年顕在化しているヤングケアラーなどの新たな課題についても取組を進めていくこととした。孤独・孤立対策プロジェクトチームでは、計7回の会議を開催するとともに、ヤングケアラーの実態調査、孤独・孤立実態調査を実施し、結果を踏まえて4つの視点での事業展開を整理し、報告書として公開した。</li> <li>令和4年度には、報告書の方針にのっとり、孤独・孤立対策官民連携 PF のベースとなる連携協定を結ぶとともに、「京都市版お悩みハンドブック」を導入した。</li> </ul>	
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール	<ul style="list-style-type: none"> <li>横の連携を強化するための支援団体同士がつながる仕組みを構築すること</li> <li>市民に対して広く孤独・孤立の問題や支援情報を周知すること</li> </ul>
		最終的なゴール	京都市の孤独・孤立対策の4つの視点 1. 関係機関・団体等の横のつながりを強化し、重層的な支援体制を構築する 2. 地域のつながりを高め、「孤独・孤立」に陥りにくく、支援につながるやすい環境を整える 3. 「孤独・孤立」に関する様々な問題に柔軟に対応できる取組を展開する 4. 漠然と「孤独・孤立」に悩む方にしっかりと情報が届くよう、広報の方法等も含めて対象者へのアプローチの方法を工夫していく

3. 地方版連携 PF における連携体制			
①	地方版連携 PF	立ち上げ年度	令和4年度
		参画メンバー	京都市、市・区社会福祉協議会、地域包括支援センター、障害者地域生活支援センター、障害者休日・夜間相談センター、こころのサポートふれあい交流サロン、男女共同参画センター、DV 相談支援センター、公益社団法人、社会福祉法人、企業、一般社団法人、NPO 法人、子ども食堂、フリースクール、子育て支援団体、民生児童委員連盟、保護観察所、保護司会連絡協議会、居場所づくり活動団体など
		選出・打診時の工夫	孤独・孤立に関する連携協定を締結 127 団体（令和6年9月18日時点） ※参画団体を随時募集している。
②	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	未(※代替あり)
		参画メンバー	京都市(区役所・支所保健福祉センター)、市・区社会福祉協議会、その他関係団体 ※社会福祉法に基づく支援会議に機能追加する形で、14 区役所・支所それぞれに設置
		選出・打診時の工夫	取り上げる具体的なケースに応じてPF団体内外から必要な支援者がアドホックで参加
4. PF 連携による価値や工夫_考え方			
<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体同士(+支援団体と当事者等)がつながるための仕組みの1つとして情報連携の基盤を整えるため、「お悩みハンドブック」をベースとした仕組みを試行する。(視点1)</li> <li>支援団体の支援および PF の活動内容を検討するための情報収集として、地域のつながりの状況、孤独・孤立の状況について市民を対象とした実態調査を行う。(視点2)</li> <li>実効的な PF とするため、PF に参画する支援団体の活動状況を把握するだけでなく、PF としてどのような活動が必要かのニーズ調査を行うことで、様々な問題に対して実態に即した取組を検討する。(視点3)</li> <li>「支援を求める声を上げやすい・声をかけやすい社会」の実現に向け、市民への広報ツールとして、キャラクターデザインの制作に取組むとともにステッカーを制作し、PF 参画団体の協力も得ながら配布を行う。(視点4)</li> </ul>			

## 2. 連携 PF イメージ

### 5. 連携PFのイメージ図



3. 試行的事業一覧					
6. 本年度に取り組む試行的事業の概要					
試行的事業のポイント・工夫		<ul style="list-style-type: none"> <li>PFの機能を活性化するための方針を定めるため、支援団体のニーズを把握する。</li> <li>調査や事業を通じて、支援団体の活動や思いを把握する。</li> </ul>			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	支援団体を対象とした実態調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>連携協定締結団体にアンケート調査等を行った。アンケートを通じて、PFについての周知を行い、PFとしての位置付けを明確化した。アンケートでは、PFとして必要だと思う活動、PFに入るとよいと思う団体等について情報を収集、整理し、次年度以降のPFの活動の検討を行った。また、②のつながる仕組みの検討に参加できる団体の募集も合わせて実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体の取組や課題意識、ニーズを把握すること</li> <li>次年度以降のPFの活動検討等のベースとすること</li> <li>支援団体に対してPFの周知を行うこと</li> </ul>	11月	— 発注なし
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 協定が京都市におけるPFであることを伝えられた。</li> <li>✓ 支援者同士が交流する機会と、課題解決事業等のニーズを把握した。</li> <li>✓ 今年度②の事業で交流会を開催することとした。また、次年度以降の実施計画のベースとなった。</li> </ul>		
②	支援団体がつながる仕組みの確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存の京都市版お悩みハンドブックが、支援団体同士(＋支援団体と当事者等)がつながるためのツールとして活用できるのかを検証した。方法としては、いくつかのPF参画団体へのヒアリングにより、知りたい情報、伝えたい情報などのニーズを聞き取ったうえで、情報をお悩みハンドブック上に掲載することとした。また、活用できるように説明会を開催し、お悩みハンドブックの活用を促すとともに、活用方法等について話し合う場を設けた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体同士のつながりの形成に活用すること</li> <li>支援団体にとって使いやすい仕組みがどのようなものか整理すること</li> <li>次年度以降の支援者同士のつながり形成に向けたニーズを把握すること</li> </ul>	11月～2月	グラフィター (254万円)
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 説明会では、支援者がつなぎ先を探すといった活用方法の意見が出た。</li> <li>✓ 最新情報に更新する必要性や、団体数を多く確保する必要性など新たな課題も意見から把握された。</li> </ul>		

③	孤独・孤立に関する実態調査	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民を対象に孤独・孤立に関する実態調査を実施し、市内の孤独・孤立の実態について把握した。具体的には全国版の実態調査をベースとして京都市版にアレンジしたアンケート調査(WEBモニター、標本数 1,000(人口分布に則った割付反映後))を実施した。結果をもとにPFに参画する支援団体への情報提供を行うとともに、行政内における政策検討のための材料として整備した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市内の孤独・孤立の状況について把握すること</li> <li>京都市内の孤独・孤立の状況について支援団体へ情報提供を行うこと</li> </ul>	1月	サーベイリサーチセンター (106万円)
			成果検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市の結果では、孤独を感じる人が「しばしばある・常にある」と回答した人は9.5%、間接質問においても合計スコアが「10~12点」の人が10.8%と、全国と比較しても若干高い傾向が見られた。</li> <li>支援団体が集まる説明会において、京都市の実態について情報提供を実施した。</li> </ul>	
④	大学生と連携した孤独・孤立対策のイメージ検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学でキャラクターデザインを学ぶ学生を巻き込み、孤独・孤立対策のイメージキャラクターの制作を実施した。具体的には、大学および講師と連携し、学生に孤独・孤立対策について知ってもらい、学生を選定、大学、講師のディレクションの下で制作に取組んでもらった。</li> <li>また、孤独・孤立対策について学生に知ってもらい、デザイン案を制作してもらうことで学生への孤独・孤立対策の周知を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>官学連携のきっかけとすること</li> <li>イメージ制作を通じた学生の孤独・孤立対策に対する理解の促進</li> </ul>	12月~1月	京都精華大学 (22万円)
			成果検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加した学生からは、取組むことで孤独・孤立対策に対する理解が進んだという意見が得られた。</li> <li>大学と課題意識を共有し、連携することができた。</li> </ul>	
⑤	京都市の孤独・孤立対策の啓発ステッカーの制作	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市の孤独・孤立対策(京都市版お悩みハンドブック)を周知啓発するためのステッカーを制作する。ステッカーを行政だけでなくPF団体とともに配布することで、PF団体への孤独・孤立対策の周知もあわせて行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立対策の一般市民への認知の拡大</li> <li>PFについてのPF参画団体への認知拡大</li> <li>お悩みハンドブックの認知度向上、利用促進</li> </ul>	2月	富士印刷社 (18万円)
			成果検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>相談窓口を設置し、気軽に受け取れるようにした。また、お悩みハンドブックのQRコードが掲載されているシールを窓口貼るなどして周知啓発に活用した。</li> <li>PF加盟団体に対して、PFの広報として配布した。また、団体から孤独・孤立対策の周知啓発として来訪者や利用者への配布を依頼した。</li> <li>職員からは、「窓口のパーテーションに貼ることでまずは何だろうと見てもらえるきっかけになった」、「キャラクターメインのステッカーなので手に取りやすい」といった声があった。</li> </ul>	

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举

- ・ PF への草の根の民間支援団体の参加団体数の拡大
- ・ 今年度実施したニーズ調査に基づく、勉強会・交流会の開催および支援団体の抱える課題に基づく事業検討

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ 連携協定について HP 上で発表したことで、加入したいという団体から連絡があった。

#### 4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

##### 【PF 立ち上げから拡大までの行程】

実務上の留意点				
連携 PF の行程	過年度	令和4年度:PF の立ち上げ	今年度	令和6年度:PF の活性化
<b>(ア)初期段階</b>				
主担当部署の設定	R4年度	■ <u>地域共生、地域づくりを担う課が担当し、「孤独・孤立対策プロジェクトチーム」で方針検討</u>	R6年度	■ <u>重層との棲み分け整理のため、重層を企画した職員が異動</u>
担当者の初動	—	—	R6年度	■ <u>答えのない問であることを踏まえ、考えながらも進めていくこととした</u>
<b>(イ)準備段階</b>				
地域の現状把握	—	—	R6年度 9月～	■ <u>定量的なデータ取得と定性的な市民・支援者の声を両輪で調査</u>
連携 PF の企画・設計	R4年度	■ <u>プロジェクトチームで定めた方針に従い、地域連携協定を締結することとした</u>	—	—
取り組みテーマの設定	R5年度	■ <u>PJT チームで定めた方針に従い、お悩みハンドブック導入を実施</u>	R6年度 9月～	■ <u>支援団体のニーズを聞き取り、実施方針を検討</u>
連携 PF の企画・設計	—	—	R6年度 9月～	■ <u>支援団体のニーズにもあった、支援団体同士のつながりづくりを推進するため、継続的に運営できるツールとして「お悩みハンドブック」を活用する</u>
初期メンバーへの声掛け	R4年度	■ <u>関係課のつながりを集約して声掛けを実施し、協定を締結</u>	—	—
<b>(ウ)設立段階</b>				
域内住民・団体への情報発信	—	—	R6年度 12月～	■ <u>キャラクター制作の取組に大学・大学生を巻き込み周知を実施</u>
連携 PF の運営	R4年度～	■ <u>連携協定という表立った形とすることで参画したいという要望が支援団体からくることもあり、団体数が徐々に拡大</u>	R6年度 2月	■ <u>お悩みハンドブックの活用促進の説明会を契機として支援団体で集まって議論を実施</u> ■ <u>支援団体のニーズに基づき実施方針を決めることとする。PFメンバーの意見を踏まえて、課題解決型で特定のテーマを提示して検討していくことも検討中。</u>
域内住民・団体への情報発信	—	—	R6年度 2月	■ <u>貰ってもらいやすいアイテムとしてステッカーを制作、PFメンバーとともに配布</u>
<b>(エ)自走段階</b>				
地域協議会の設置	R5年度	■ <u>令和6年度より重層的支援体制整備を進めていくために検討を開始</u>	R6年度 10月～	■ <u>重層的支援体制整備事業において、区・支所単位で地域にあった支援を実施</u>
PF の拡大・活性化	—	—	今後	■ <u>PF は市域全体で草の根の支援団体をつなぐ役割として拡大を目指す</u>

##### 【それぞれの段階での留意】

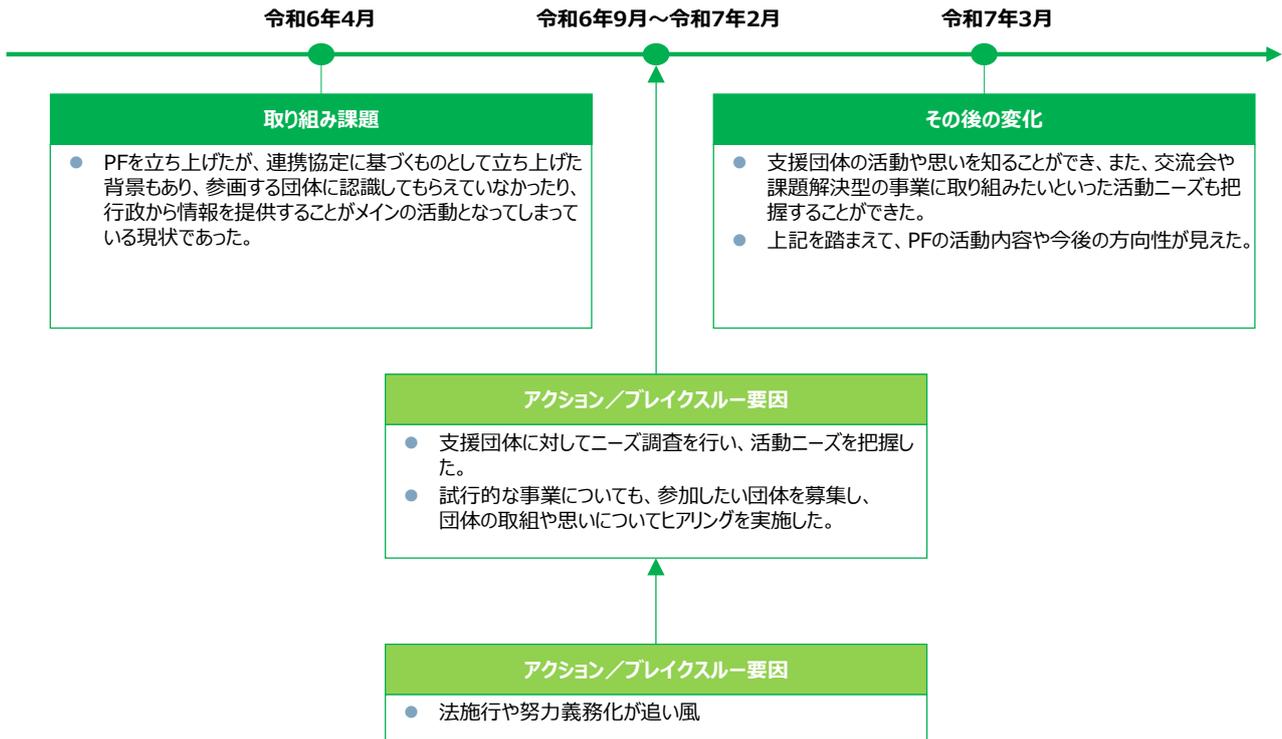
(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	<p>■<u>地域共生、地域づくりを担う課が担当し、庁内 PJT チームで方針検討</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>はざまの支援を行うという観点から地域共生を担当している課が孤独・孤立対策も重層事業も担当している。</li> <li>(令和3年)庁内で PJT チームを立ち上げ、孤独・孤立対策の方向性をとりまとめた。</li> </ul> <p>■<u>層との棲み分け整理のため、重層を企画した職員が異動</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>重層の担当から異動し、重層と孤独・孤立対策の体制整備を検討することとなり、まずは法の通知等の情報を読み込んだ。</li> </ul>
②	担当者の初動	<p>■<u>答えのない問であることを踏まえ、考えながらも進めていくこととした</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>答えのある問題ではないため、取組を進めつつ検討していくこととし、支援団体の話を聞く中で方向性を検討していくこととした。</li> </ul>

(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	<p>■<u>定量的なデータ取得と定性的な市民・支援者の声を両輪で調査</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和 6 年 11 月～令和7年 1 月)行政内や支援団体における活動の位置付けや意義を説明するためには定量的なデータと市民の声が必要と考え、市民アンケートと支援団体向けアンケートおよびヒアリングの実態調査を実施した。</li> </ul>
④-1	取組テーマ決定	<p>■<u>支援団体のニーズを聞き取り、実施方針を検討</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>取組テーマは、支援団体のニーズに基づくべきと考え、支援団体向けのアンケートを実施し、交流や課題解決事業へのニーズが把握された。</li> <li>団体のニーズを聞き取るからには、ニーズに基づく取組を今後推進することが必要であるため、自治体として事業を継続的に続けるための法整備や努力義務化は重要。</li> </ul>
④-2	連携 PF の企画・設計	<p>■<u>PJT チームで定めた方針に従い、連携協定とお悩みハンドブック導入を実施</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和 4 年)とりまとめに記載の連携協定およびお悩みハンドブックを実践。</li> </ul> <p>■<u>支援団体のニーズにもあった、支援団体同士のつながりづくりを推進するため、継続的に運営できるツールとして「お悩みハンドブック」を活用する</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体同士の交流ニーズに応えるためにも、継続的に使用できる「お悩みハンドブック」による支援団体同士のつながりづくりの検討および説明会を通じた支援団体同士の交流機会を設けた。</li> </ul>
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	<p>■<u>法整備や努力義務化や庁内連携の後押しとなった</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和 6 年 4 月)法施行および努力義務化が決まり、庁内での理解が広まった。</li> <li>令和 5 年度に重層の検討をした担当者が孤独・孤立対策の担当に異動し、孤独・孤立対策と重層(令和 6 年度から本格実施)の棲み分けを検討した。</li> </ul> <p>■<u>大きな自治体において庁内での理解促進のための情報整備は重要</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和 7 年 1 月)定量的なデータと市民の声が必要と考え実態調査を実施。</li> </ul>
		<p>■<u>関係課のつながりを集約して声掛けを実施し、協定を締結。表立った形とすることで参画したいという要望を受け団体数が徐々に拡大。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和 3 年)ベースとして、子ども、高齢者、障がい、生活困窮、自殺、居住支援、男女共同参画等のそれぞれの福祉分野で関わりのある団体に声掛けを実施した。既存のつながりで民間の団体等にも声掛けをした。地域連携協定として公にすることで支援団体側から連絡があり入ってもらったケースもある。設立当初の 120 団体から 7 団体増えて 127 団体になっている。</li> </ul>

(ウ) 設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	<p>■キャラクター制作の取組に大学・大学生を巻き込み周知を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (令和 6 年 12 月)対策推進のイメージづくりを通じて大学と連携、大学生への周知啓発を実施。</li> </ul> <p>■もらってもらいやすいアイテムとしてステッカーを制作、PF メンバーとともに配布</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (令和 7 年 2 月)孤独・孤立対策のステッカーを制作し PF 参画団体とともに配布。</li> </ul>
⑦	連携 PF の運営	<p>■お悩みハンドブックの活用促進の説明会を契機として支援団体で集まって議論を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ お悩みハンドブックの活用方法の説明会を契機として、支援団体の集まる場を設けて、お悩みハンドブックの活用や支援団体同士のつながりづくりについてディスカッションを実施。</li> </ul> <p>■支援団体のニーズに基づき実施方針を決めることとする。PF メンバーの意見を踏まえて、課題解決型で特定のテーマを提示して検討していくことも検討中。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ その都度支援団体のニーズに基づき、勉強会・交流会の開催や、課題解決型の事業検討等を推進していく予定。活動を検討するための話し合いの場をもうけることも検討中。孤独・孤立対策は広いため、特定の課題をテーマとして取り扱うことも検討。</li> </ul>

(エ) 自走段階		
⑧	地域協議会の設置	<p>■重層的支援体制整備事業において、区、圏域単位で地域にあった支援を実施</p> <p>(令和 6 年 10 月)重層と棲み分けることで新たな縦割りを生むことを懸念し、包括化することも検討したが、現在は、14 区・支所やその中の圏域、学区域で連携し、地域に根差して支援をする重層と、市域全体での多くの活動者のつながりをつくる孤独・孤立対策が重なって活用しあう体制を検討中。</p>
⑨	PF の拡大・活性化	<p>■PF は市域全体で草の根の支援団体をつなぐ役割として拡大を目指す。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ PF の参画団体については、孤独・孤立対策では特に民間の団体や、草の根で活動している団体に広げていくことを目指す。</li> </ul>

ブレイクスルー要因	
アクション/ ブレイクスルー要因	<p>■支援団体の活動や思いを聞き取ることで今後の方針を見出す</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>行政からの情報提供にとどまっていると、支援団体からの反応は得られにくく、支援団体の活動や思いを知ることができなかったが、支援団体に対してニーズ調査を実施したり、ヒアリングを実施することで、支援団体の活動や思いを知ることができ、支援団体のニーズに合った今後の PF の方針を見出すことができた。</li> </ul> <p>支援団体のニーズを聞き取ることは、要望型になるリスクも含んでおり、実施しにくい、法整備や努力義務化の後押しもあり、行政としても取り組んでいくことが確定したことが追い風となって、取り組むことができた。</p>



## コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

### 子育て支援団体「ママキラ☆プロジェクト」

- ・ 京都市で、「ママの居場所づくり」を展開する子育て支援団体。家庭の中に、子どもの居場所ができるように、「イライラしない子育て講座」を行い、ママのキラキラ輝く笑顔を応援することを目指す。こども食堂「カレーパーティー」をきっかけとして、「人のご縁」を大切に、困りごとを解決している。他にも、「ハンドメイド」「ヨガ」「学習支援」「プログラミング教室」「若者しゃべり場」など、活動は多岐にわたる。
- ・ 「子どもの喜びは、ママの喜びにつながる」という考えのもと、「学習支援」や「プログラミング教室」、体験型イベントなど、「子どもの居場所づくり」も積極的に展開している。さらに、大学生ボランティアは、登録上約80名おり、ボランティア後の「若者しゃべり場」では、大学生が本音で語り合うなど、「若者の居場所」ともなっている。
- ・ ママからの SOS は、ある日突然起きる。そのとき相談する相手は、普段から信頼している人、安心できる居場所。だからこそ、日頃から地域コミュニティとつながり、多世代が自然な形で交流できる「誰が来ててもよい居場所」をつくることで、孤独・孤立の解消に取り組んでいる。

#### 📍 困難はある日突然起きるため、普段から誰でも居て良い居場所が必要

- ・ 困ったことは、ある日突然起きる。その時に、いきなり知らない場所を探して、支援を求めることは難しい。困ったことが起きる前から、つまり常日頃から、「自分が居て良い」と思える居場所があることが重要となる。「ハンドメイド」「ヨガ」は、ママにとっては「ママキラに行く理由」「ここに居て良い理由」となる。自分にやることがあると、初めての人も参加しやすく、すぐに打ち解け合える。
- ・ また、「子育て講座」やイベントの後には、必ずコーヒータ임을設け、本音で話し合える場をつくっている。そこでは、子育ての悩み、夫婦の悩み、病気のことなど、抱え込んだ苦しみを吐き出すことができる。このように、普段から安心できる居場所、信頼できる人とつながっていることが重要である。

#### 📍 喜びの声や写真をフィードバックすることで、企業や団体との連携強化を図る。

それが、いざというときの「支援のつながり」をうむ。

- ・ PF が目指す「支援をつなぐ」ことができている背景には、企業や団体との連携が多彩で、強固であることが挙げられる。
- ・ 企業や団体から支援を受けたとき、子どもたちの喜びの声や活動写真を、丁寧にフィードバックしている。その結果、ママキラと企業・団体との個々の連携が強まり、いざというときの「支援のつながり」を生んでいる。ママや子どもを喜ばせるだけでなく、企業や団体にも喜びを返していく。その「よこびの循環」こそが、地域社会全体の支援を生み出している。

#### 📍 行政と連携するメリットは、信用を得られること

- ・ 「お悩みハンドブック」は、あくまでもツールである。これを良いツールにするためには、「信頼できる居場所」がたくさん探せるようにならないといけない。また、その情報自体の「信用」も重要である。草の根の団体にとって、行政と連携するメリットは、何よりも「行政の信用」である。「あれに載っているなら安心できる団体だ」と思われるようなツールになると活用の幅も増えてくるのではないかな。いずれにせよ、居場所の数を増やしつつも、質を担保していく必要がある。
- ・ 現在の各支援団体の代表者は、世代的にデジタルに疎く、なかなか付いてこれられない人も多いかもしれない。しかし、10年もすればデジタルツールがあたりまえになり、現実的なものになると思う。これから10年で、「信用のある居場所」の量と質を担保できると良いだろう。



世界の平和は、家庭から。  
家庭の平和は、ママの笑顔から。  
ママキラ☆プロジェクトは、  
子ども、ママ、若者に居場所をつくり、  
みんなのキラキラ輝く笑顔を応援します。  
<https://mamakira.com>

ママキラ☆プロジェクト  
代表・上川里枝

## 5.自治体等との打合せ記録一覧

No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	8/5(月) 16:00-17:30	京都市 保健福祉局	青木様(昨年度ご担当)、村松様	生駒、橘、山崎
2	8/13(火) 15:00-16:30	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	生駒、橘、 小田、山崎
		(株)グラフィアー	池永様、青木様、佐藤様	
3	9/6(金) 10:00-11:30	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	生駒、橘、 小田、山崎
4	10/3(木) 15:30-17:00	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	生駒、橘、 小田、山崎
5	11/18(月) 13:00-14:00	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	生駒、橘、小田
6	11/28(木) 10:30-11:30	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	生駒、橘、小田
		京都精華大学	福岡様	
7	12/24(火) 14:00-15:00	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	生駒、橘
		京都精華大学	福岡様	
8	1/7(火) 14:00-15:00	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	橘、小田
		(株)サーベイリサーチセンター	砂川様	
9	2/7(金) 14:00-16:00	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	橘
		(株)グラフィアー	青木様、佐藤様	
10	2/14(金) 16:30-18:00	京都市 保健福祉局	村尾様	橘
		「ママキラ☆プロジェクト」	上川様、上川様	
11	2/17(月) 13:00-14:30	京都市 保健福祉局	村尾様	橘、小田
		下京中部地域包括支援センター	木村様、加々美様	
12	2/17(月) 17:30-19:00	京都市 保健福祉局	村尾様、村松様	橘、小田

# 自治体による従前からの取組

## ■ 孤独・孤立に関する連携協定

### (取組概要)

京都市では、孤独・孤立に関する課題に関して取組む関係団体等の横のつながりを強化することで、複雑・複合化した課題を抱える方にとっての重層的な支援体制を構築するため、令和4年9月1日に関係団体等と「孤独・孤立に関する連携協定」を締結した。加盟団体は令和7年3月時点で127団体ある。

図表 孤独・孤立に関する連携協定締結団体一覧

「孤独・孤立に関する連携協定」締結団体一覧		令和6年9月18日時点 127団体 (50音順)	
嵐山こども食堂	京都市久我の杜地域包括支援センター	京都市常盤野地域包括支援センター	子育て支援団体「ママキラプロジェクト」
安養寺フリースクール	京都市こころのふれあい交流サロンにしきょう	京都市南部障害者地域生活支援センター「かいはし」	社会福祉法人市原寮
一般社団法人S88隊 (※)	京都市西院地域包括支援センター	京都市南部障害者地域生活支援センター「ふかくき」 (※)	社会福祉法人京都いのちの電話
一般社団法人京都わかべさねっと	京都市西京南地域包括支援センター	京都市西京南地域包括支援センター	社会福祉法人京都市右京区社会福祉協議会
一般社団法人GreenLand	京都市西京北地域包括支援センター	京都市西京北地域包括支援センター	社会福祉法人京都市上京区社会福祉協議会
一般社団法人高齢者住宅支援連絡会	京都市西ノ京地域包括支援センター	京都市西ノ京地域包括支援センター	社会福祉法人京都市北区社会福祉協議会
一般社団法人つなぐ	京都市仁和地域包括支援センター	京都市仁和地域包括支援センター	社会福祉法人京都市左京区社会福祉協議会
一般社団法人say whereabouts	京都市嵯峨地域包括支援センター	京都市花園地域包括支援センター	社会福祉法人京都市下京区社会福祉協議会
NPO法人NMIジャパン京都事務所	京都市左京北地域包括支援センター	京都市原谷地域包括支援センター	社会福祉法人京都市社会福祉協議会
NPO法人京都教育サポートセンター	京都市左京南地域包括支援センター	京都市東九条地域包括支援センター	社会福祉法人京都市中京区社会福祉協議会
株式会社アイバード	京都市山階地域包括支援センター	京都市東高瀬川地域包括支援センター	社会福祉法人京都市西京区社会福祉協議会
株式会社ホーム・ライブ	京都市崇竹地域包括支援センター	京都市東山地域包括支援センター	社会福祉法人京都市東山区社会福祉協議会
京都市	京都市島原地域包括支援センター	京都市日ノ岡地域包括支援センター	社会福祉法人京都市伏見区社会福祉協議会
京都市嵐山地域包括支援センター	京都市下京西部地域包括支援センター	京都市終野地域包括支援センター	社会福祉法人京都市南区社会福祉協議会
京都市栗田地域包括支援センター	京都市下京中部地域包括支援センター	京都市深草中部地域包括支援センター	社会福祉法人京都市山科区社会福祉協議会
京都市岩倉地域包括支援センター	京都市下京東部地域包括支援センター	京都市深草南部地域包括支援センター	社会福祉法人京都福祉サービス協会 高齢者福祉施設 禁野
京都市梅津地域包括支援センター	京都市下島羽地域包括支援センター	京都市深草北部地域包括支援センター	社会福祉法人京都老人福祉協会
京都市御池地域包括支援センター	京都市修学院地域包括支援センター	京都市鳳徳地域包括支援センター	社会福祉法人健光園
京都市大原地域包括支援センター	京都市修徳地域包括支援センター	京都市北部障害者地域生活支援センター「はくはく」 (※)	社会福祉法人洛東園
京都市大宅地域包括支援センター	京都市障害者休日・夜間相談センター	京都市保護司会連絡協議会	特定非営利活動法人京都社会福祉推進協議会 (※)
京都市小川地域包括支援センター	京都市白川地域包括支援センター	京都市本能地域包括支援センター	特定非営利活動法人Queer and Women's Resource Center
京都市音羽地域包括支援センター	京都市朱雀地域包括支援センター	京都市民生児童委員連盟 (※)	特定非営利活動法人ハートプライト
京都市桂川地域包括支援センター	京都市成逸地域包括支援センター	京都市向島地域包括支援センター	特定非営利活動法人happiness
京都市葛野地域包括支援センター	京都市西部障害者地域生活支援センター「うきょう」	京都市常盤野地域包括支援センター	特定非営利活動法人フードバンク京都
京都市唐橋地域包括支援センター	京都市西部障害者地域生活支援センター「西京」	京都市嵯山地域包括支援センター	特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば
京都市勤修地域包括支援センター	京都市醍醐南部地域包括支援センター	京都市淀地域包括支援センター	特定非営利活動法人ゆい
京都市久世地域包括支援センター	京都市醍醐北部地域包括支援センター	京都市洛東地域包括支援センター	特定非営利活動法人若者と家族のライフプランを考える会
京都市香掛地域包括支援センター	京都市高野地域包括支援センター	京都保健観察所	特定非営利活動法人ReFrame
京都市京北地域包括支援センター	京都市男女共同参画センター ウィングス京都	公益社団法人京都犯罪被害者支援センター	認定 NPO 法人京都自死・自殺相談センター
京都市嵯峨地域包括支援センター	京都市中部障害者地域生活支援センター「なごやか」	公益財団法人京都市ユースサービス協会	東山区「不登校・ひきこもりを考える親の会」「シオンの家」
	京都市中部障害者地域生活支援センター「にしじん」	公益財団法人ソーシャルサービス協会ワークセンター	フリースクールわく星学校
	京都市DV相談支援センター	合同会社オフィスルピナス	ホームネット株式会社
	京都市陶化地域包括支援センター	こころのカフェきょうと (※)	有限会社京都くらし支援センター (※)
		社会福祉法人南山城学園 (※)	

(※)印は、令和4年9月1日の連携協定締結式以降に参画意向があった団体

出典) <https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000304230.html>

■ 京都市版 お悩みハンドブック

(取組概要)

京都市では、悩み事があるけれども、支援制度や相談先がわからないという方に相談先を探すために利用できる情報ツールとして、京都市版お悩みハンドブックを導入している。個人情報の登録は不要で、当てはまる悩みにチェックをつけていくことで、役立つ情報を見つけることができる。

図表 京都市版お悩みハンドブックの画面



出典) <https://compass.graffer.jp/handbook-city-kyoto/landing>

試行的事業	
① 支援団体を対象とした実態調査	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>連携協定締結団体にアンケート調査等を行った。アンケートでは、PF として必要だと思ふ活動、PF に入るとよいと思ふ団体等について情報を収集、整理し、次年度以降の PF の活動の検討を行った。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>現在活動が情報共有にとどまっている PF を活性化するために、支援団体のニーズに基づく活動を計画すること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケートに合わせて、PF についての周知を行い、PF としての位置付けを明確化した。</li> <li>支援団体のつながる仕組みの検討への参加も募集した。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体同士がつながることや、課題解決型の事業推進等のニーズが把握でき、今年度もつながる仕組みづくりの事業において説明会の場で交流する機会を設けるとともに、次年度以降の実施計画のベースとした。</li> </ul>

(実施概要)

10月～11月にかけて、市からPFのメンバーである支援団体を対象として以下の設問のアンケート調査を実施した。アンケート調査は市のHP内の回答フォームを利用し実施した。

アンケートとあわせて、PFの周知や、試行的事業②の取組への参加希望の聞き取りもあわせて実施した。

結果として、30団体から回答があり、以下の示唆が得られた。(回答は一部抜粋)

つながりのニーズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体同士でつながりたいというニーズが得られた</li> <li>具体的につながりたい団体、PFに入るとよいと思ふ団体として、以下のような団体が挙げられた。 ひきこもり・不登校を支援している団体、住宅支援をしている団体、子どもの居場所等の支援につなげることができる企業、福祉関係以外の企業等、金融機関、小売店舗、薬局・学校の先生</li> </ul>
PFの今後の活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>勉強会や研修会 (内容:地域共生社会について、医療従事者の講演、多職種・他機関協働の事例、自立支援)</li> <li>互いの活動を共有する交流会 (活動紹介、交流会、信頼関係を構築する場)</li> <li>具体的な事例を共有、複合的な課題をかかえたケースの検討会</li> <li>特定の課題について議論する場、グループディスカッション</li> </ul>
試行的事業②への参加意向	<ul style="list-style-type: none"> <li>今年度の試行に参加したい 8 団体</li> <li>次年度の試行に参加したい 5 団体</li> </ul>
お悩みハンドブックの掲載内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>それぞれの団体の対応範囲、対象者</li> <li>業務内容、取組、つないだ後どのように対応するのか</li> <li>連絡先、活動場所</li> <li>強み</li> </ul>
広報の手法	<ul style="list-style-type: none"> <li>チラシ等の設置個所の提案 (医療機関、商業施設、駅、保育園、教育機関、バス広告、銀行・郵便局、薬局、イベント会場、福祉施設、ゲームセンター、寺社、喫茶店、トイレなど)</li> <li>広報媒体の提案 (TV・インターネット・SNS広告、グッズ制作、商業施設での説明会、動画、紙芝居、回覧板、学校での案内、居場所マップの制作など)</li> </ul>

(関連資料) 調査票

No.	質問	回答欄イメージ
<b>前提</b>		
1	団体名	(自由記述)
<b>プラットフォームでやりたいこと等について</b>		
京都市では、本年4月の孤独・孤立対策推進法の施行を踏まえ、「孤独・孤立に関する連携協定」を同法に基づく「地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム」と位置付けて、団体間の横のつながり・相互連携を更に強化していくことで、孤独・孤立をはじめ、複雑化・複合化した課題を抱える方にとっての重層的な支援体制を推進したいと考えています。		
2	プラットフォームにおいてどのような取組をしたいですか。又は、どのような取組があれば参加したいですか。	(自由記述)
3	プラットフォームにおいてどのような団体とつながりたいですか。	(自由記述)
4	プラットフォームに新たに加わったら良いと思うのはどのような団体ですか。	(自由記述)
5	孤独・孤立対策に関して関係団体等がつながるためにどのような機会があると良いと思いますか。	(自由記述)
6	孤独・孤立対策に関して関係団体等がつながるに当たって課題はありますか。それはどのような課題ですか。	(自由記述)
7	プラットフォームの参画団体向けに研修会を実施する場合、どのようなテーマや講師の講義を受けたいですか。	(自由記述)
<b>お悩みハンドブックでの情報共有等について</b>		
京都市では、支援制度や窓口を簡単に検索できる「京都市版お悩みハンドブック <sup>※</sup> 」を拡張して、支援団体同士の情報共有、また、支援団体に関する情報発信の仕組みを構築したいと考えています。 ※ <a href="https://compass.graffer.jp/handbook-city-kyoto/landing">https://compass.graffer.jp/handbook-city-kyoto/landing</a>		
8	他団体に関して知りたいこと、自団体に関して他団体に知ってほしいことはありますか。	(自由記述)
9	自団体に関して、孤独・孤立の状態にある当事者等に知ってほしいことはありますか。	(自由記述)
10	今年度、試行的に数団体のページを作成する予定です。参加してみたいと思いますか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今年度の試行に参加したい</li> <li>・次年度以降に参加したい</li> <li>・参加したくない</li> <li>・分からない</li> </ul>
<b>孤独・孤立対策としての広報について</b>		
京都市では、孤独・孤立の問題や、「京都市版お悩みハンドブック」をはじめとする支援情報について、もっと広く市民に知ってもらうための広報を強化したいと考えています。		
11	市内でチラシを設置する場合、公共施設のほか、どのような場所・施設が良いと思いますか。	(自由記述)
12	上記の場所・施設をはじめ、チラシの設置に向けて協力を依頼するために、つないでいただけたところはありますか。	(自由記述)
13	チラシの配布以外で、実施すると良いと思う広報はありますか。 (手法、対象、内容 等)	(自由記述)

② 支援団体がつながる仕組みの確立	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>既存の京都市版お悩みハンドブックは当事者等が公的な支援制度や相談窓口を見つけ出せるツールだが、支援団体同士(+支援団体と当事者等)がつながるためのツールとして活用できるのかの検証として、支援団体向けの支援団体紹介ページへの情報の掲載を実施した。</li> <li>掲載内容は、支援団体へのヒアリング調査に基づいて、必要な情報を入れ込んだ。</li> <li>活用方法を伝えるために説明会を開催し、PFに参画する団体に集ってもらい、活用方法について話し合うグループワークを実施した。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体同士がつながることで、途切れない支援を提供できる体制を構築すること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>掲載内容は、支援団体に詳しくヒアリングすることで、お互いに知りたい情報、伝えたい情報などのニーズを聞き取った。</li> <li>説明会を開催することで、活用促進および支援団体の交流場を設けた。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体からつなぎ先を探る際に活用できるといった意見が得られた。</li> <li>説明会においてさらなる改善点等についても意見を得ることができた。</li> <li>支援団体へのヒアリングを通じて支援団体について知る機会となった。</li> </ul>

(実施概要)

既存の京都市版お悩みハンドブックは支援団体と当事者がつながるためのツールであるが、支援団体同士がつながるためのツールとして活用できるのかを検証した。方法としては、試行的事業①において参加希望を出した団体からいくつかの団体を対象とし、団体へのヒアリングを実施した。ヒアリング結果に基づき、団体の活動内容や、知りたい情報、伝えたい情報などのニーズを聞き、支援をカテゴリ化する等工夫をして、情報をお悩みハンドブック上に掲載した。

図表 今年度の取組



お悩みハンドブックが活用されるように PF の参画団体を対象とした説明会を開催し、お悩みハンドブックの活用を促すとともに、活用方法等について話し合う場を設けた。説明会では、「お悩みハンドブック」の制作者から設計上の工夫や意図について直接伝えてもらうことで、PF の団体の理解を深めることができた。支援団体同士がつながるきっかけとしても活用できるように、お互いの広報物を共有したり、孤独・孤立対策として何が必要かを話し合う機会としても活用した。

図表 説明会の様子



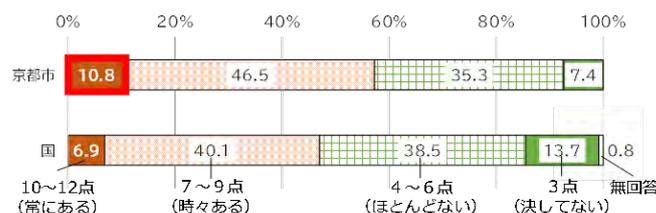
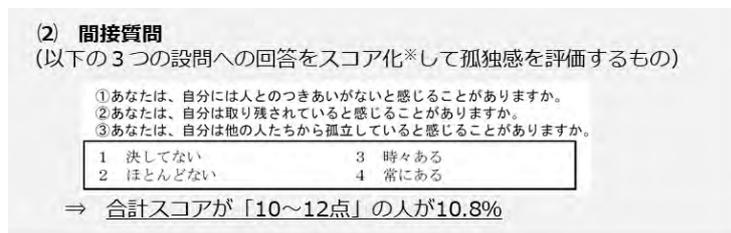
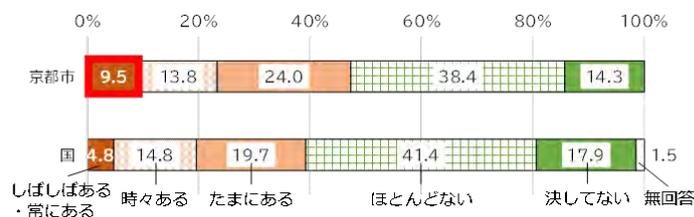
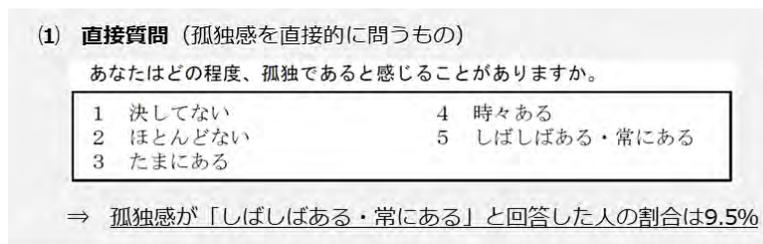
③ 孤独・孤立に関する実態調査	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民を対象に孤独・孤立に関するアンケート調査を実施し、孤独・孤立の実態を把握した。結果をもとに PF に参画する支援団体への情報提供を行うとともに、行政内における政策検討のための材料として整備した。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>行政内や支援団体における活動の位置付けや意義を説明するためには定量的なデータと市民の声が必要と考えた。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート調査票に啓発のメッセージを掲載することで、あわせて孤独・孤立の問題の周知啓発を行った。</li> <li>全国版の調査と内容をあわせることで全国と結果を比較できるようにした。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市の結果では、全国と比較しても若干高い傾向が見られた。</li> <li>支援団体が集まる説明会において、京都市の実態について情報提供を実施した。</li> </ul>

(実施概要)

全国版の実態調査をベースとして京都市版にアレンジしたアンケート調査(WEB モニター、標本数 1,000(人口分布に則った割付反映後))を実施した。

結果をもとにPFに参画する支援団体への情報提供を行うとともに、行政内における政策検討のための材料として整備した。

図表 調査結果抜粋



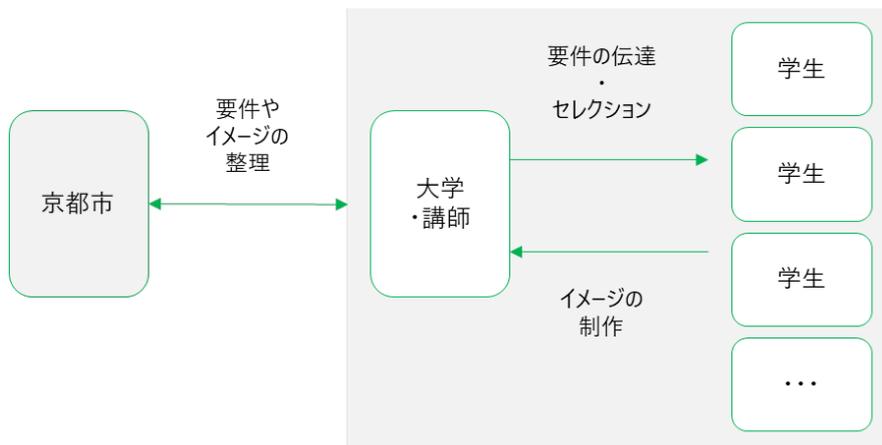
※ 「決してない」を1点、「ほとんどない」を2点、「時々ある」を3点、「常にある」を4点としてスコア化。合計スコア(3点～12点)が高いほど孤独感が高いと評価。

④ 大学生と連携した孤独・孤立対策のイメージ検討	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学でキャラクターデザインを学ぶ学生を巻き込み、孤独・孤立対策のイメージキャラクターの制作を実施するとともに、その過程を通じて学生に対する孤独・孤立対策の普及啓発を実施した。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>官学連携のきっかけとすること。</li> <li>イメージ制作を通じた学生の孤独・孤立対策に対する理解の促進。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学および講師と連携し、学生に孤独・孤立対策について知ってもらい、学生を選定、大学、講師のディレクションの下で制作に取り組んでもらった。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>参加した学生からは、取り組むことで孤独・孤立対策に対する理解が進んだという意見が得られた。</li> <li>大学と課題意識を共有し、連携することができた。</li> </ul>

(実施概要)

京都精華大学のキャラクターデザインを学ぶ学生を対象に京都市の孤独・孤立対策のキャラクターデザインを考えてもらうことで、大学生を対象とした孤独・孤立対策の普及啓発を行った。制作にあたっては、大学および講師と連携し、学生に孤独・孤立対策について知ってもらい、学生を選定、大学、講師のディレクションの下で制作に取り組んでもらった。京都市の意向を講師を経由して、学生に伝えることで、キャラクター制作に取り組んでもらった。学生からは人や動物、和傘などをモチーフにした様々なキャラクターデザインの提案があった。

図表 連携体制図



図表 参加した学生の感想

今回の機会をどう思ったか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年12月に指導教員からキャラクターデザインの募集について説明を聞いたとき、「担当してみたい」と強く感じました。これまで学んできたことや身に付いた描画スキルが、実際に活かせる良い機会になると考えました。</li> </ul>
孤独・孤立についての理解が深まったり、関心がわいたか。	<ul style="list-style-type: none"> <li>当初は問題意識のない分野でしたが、アイデアを捻りラフを描き、また修正を重ねていく過程で、孤独・孤立についてのイメージが重層化していき、より理解が深まったと思います。</li> </ul>
その他意見・感想	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市の仕事としてキャラクターデザインに取り組むというとても貴重な機会を得ることができ、感謝しています。授業とは異なる緊張感をもって制作に臨んだことにより、この短期間でも成長できたと感じています。</li> </ul>

⑤ 京都市の孤独・孤立対策の啓発ステッカーの制作	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市の孤独・孤立対策を周知啓発するためのステッカーを制作した。</li> <li>お悩みハンドブックの QR コードを貼り付けることで、支援窓口の周知につながるようにした。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>京都市の孤独・孤立対策について周知を拡大すること。</li> <li>お悩みハンドブックの認知度を拡大すること。</li> <li>支援団体に対して、PF の理解を促進すること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>子どもやその親にも受け取ってもらいやすいアイテムとしてステッカーを選定した。</li> <li>PF で配布することで支援団体の意識啓発を行った。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>相談窓口を設置し、気軽に受け取れるようにした。また、相談窓口の QR コードが掲載されているシールを窓口に貼るなどして周知啓発に活用した。</li> </ul>

(実施概要)

京都市の孤独・孤立対策(京都市版お悩みハンドブック)を周知啓発するためのステッカーを制作した。ステッカーを行政だけでなく PF 団体とともに配布することで、PF の団体への孤独・孤立対策の周知もあわせて行った。お悩みハンドブックの QR コードを掲載することで、当事者等が支援制度や窓口につながるようにした。学生が制作したキャラクターを掲載するとともに、チラシではなくステッカーとすることで受け取ってもらいやすい様に工夫した。

相談窓口を設置し、気軽に受け取れるようにした。また、お悩みハンドブックの QR コードが掲載されているシールを窓口に貼るなどして周知啓発に活用した。PF の団体に対して、PF の広報として配布した、また、団体から孤独・孤立対策の周知啓発として配布を依頼した。職員からは、「窓口のパーテーションに貼ることでまずは何だろうと見てもらえるきっかけになった」、「キャラクターメインのステッカーなので手に取りやすい」といった声があった。

図表 ステッカーイメージ



図表 窓口のパーテーションに貼っている様子



## 2-2. 岡崎市

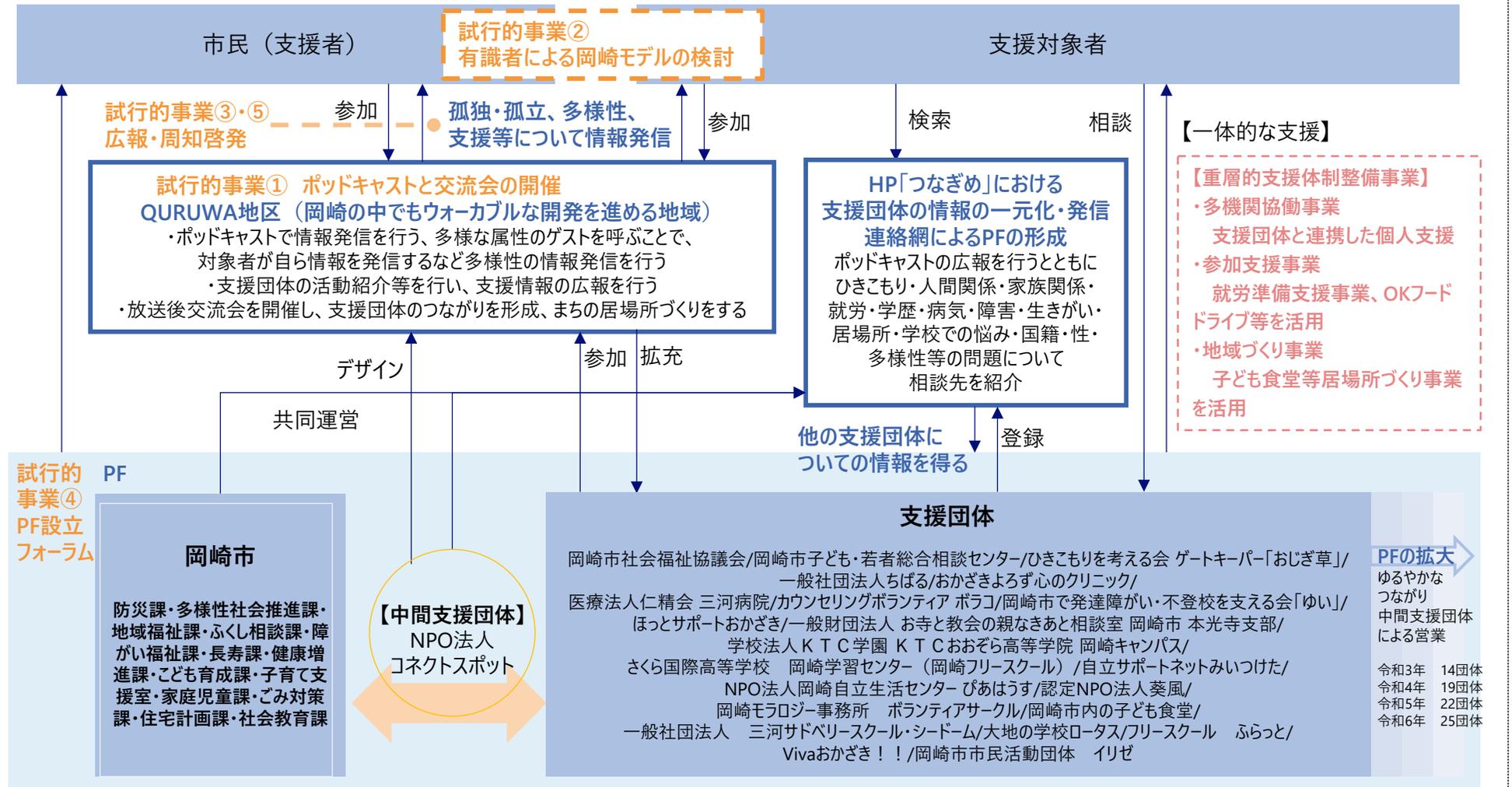
No.	2	岡崎市
-----	---	-----

1. 取組の全体像			
1. 自治体の概要			
①	自治体名	岡崎市	
②	担当部局名	福祉部ふくし相談課	
③	人口	384,654(人) <令和2年 10 月/国勢調査>	
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)	福祉部ふくし相談課
		庁内連携内 ※会議体、情報共有	・重層的支援体制整備事業に基づく支援会議 ・重層的支援会議
		庁内連携部局(メンバー)	岡崎市福祉部障がい福祉課、岡崎市保健所 健康増進課、岡崎市子ども・若者総合相談センター(わかサポ)、岡崎市社会福祉協議会
		庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・多機関協働事業を担うふくし相談課に個別事例に関する相談が来るため、日常的な対話がある
2. 形成をめざす地方版連携 PF の姿			
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和 3 年度から重層的支援体制整備事業を開始</li> <li>令和 4 年度から地域づくりの一環として、地域、地域包括、民生委員・児童委員および支援関係者と個別避難計画作成支援を実施</li> <li>令和 5 年 2 月から生きづらさに寄りそうポータルサイト「つなぎめ」を NPO 法人コネクトスポットと共同運営を開始、情報発信を実施</li> <li>令和6年1月から住まい連携推進員を配置した住まい支援センターを設置し、居住支援協議会と連携して入居支援と日常生活支援等が一体となった居住支援を実施</li> <li>まちづくりでは、平成26年のまちづくり構想の提言を起源とする QURUWA プロジェクトでウォークアブルなまちづくりを推進している</li> </ul>	
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストの運営を通して、PF 参画団体が定期的に協働したり、地域市民の方との接点を持つ場をつくる。支援者間の交流の場「あわいスタンド」を開催し、今後の持続可能性を検証する。</li> <li>ポッドキャストの運営を通じて、孤独・孤立の課題を市民に周知するとともに、多様な市民が認め合うまちづくりを推進する。</li> </ul>
		最終的なゴール	<ul style="list-style-type: none"> <li>PF 参画団体が、詳細な活動内容は違うが、同じ孤独・孤立を課題解決する、仲間であるという認識をもち、連帯感をもって支援に臨める体制を整備する。</li> <li>関わったことのない分野や団体を巻き込むことで、把握できていない潜在的な孤独・孤立に陥っている層を掘り起こす。</li> </ul>

3. 地方版連携 PF における連携体制			
③	地方版連携 PF	立ち上げ年度	令和6年度
		参画メンバー	岡崎市社会福祉協議会、「つなぎめ」に登録する支援団体(一般社団法人、医療法人、ボランティア、一般財団法人、学校法人、NPO 法人、こども食堂、市民活動団体など)
		選出・打診時の工夫	民間主体で「つなぎめ」に登録している支援団体 ※参画団体は随時募集しており、試行的事業を通じてつながった団体を追加していく。
④	地域協議会 ※特に専門性の高い支援を行う団体等で構成	立ち上げ年度	未(※代替あり)
		参画メンバー	※重層的支援体制整備事業における重層的支援会議が協議会の役割を担う。そのため孤独・孤立対策は予防的な観点、潜在層の掘り起こしを担い、支援が必要な対象者を PF メンバーで支援するとともに、必要に応じて、重層的支援会議につなぐ機能を担う。
		選出・打診時の工夫	—
4. PF 連携による価値や工夫_考え方			
<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立の課題解決には、市民に岡崎市には多様な人がいることを知ってもらうことが重要という考えのもと、ポッドキャストによる多様な市民から情報発信を行うことで、孤独・孤立対策を進め、潜在的な孤独・孤立層の掘り起こしを試みる。</li> <li>情報発信をウォークアブルなまちづくりの推進地区において、公開収録型で行うことで、関心を持った市民や支援団体、通りがかりの市民が集う場所をつくり、支援団体同士の定期的な接点づくりや、市民の居場所づくりを併せて行う。また、補助事業終了後も継続的にポッドキャストの運営を行うために支援者間の交流の場「あわいスタンド」を開催し、今後の持続可能性を検証する。そうすることで、将来的には民間による運営を目指す。</li> <li>ポッドキャストについては、チラシや運営する NPO の HP を通じて広報を行う。ポッドキャストを通じてつながった支援団体を含めて、支援団体同士が互いを知り、つながるために、HP では支援団体の情報の情報発信も併せて行う。</li> </ul>			

## 2. 連携 PF イメージ

### 5. 連携PFのイメージ図



### 3. 試行的事業一覧

#### 6. 本年度に取り組む試行的事業の概要

試行的事業のポイント・工夫		<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストによって、広報と居場所づくり、支援団体同士の交流を一体的に進める。</li> <li>有識者の視点も織り交ぜつつ、市民の生活史から実態把握に取り組む。</li> </ul>			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	ポッドキャストと交流会	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャスト「こどくのあわい」で岡崎市の市民に焦点をあて、市民の生活史を発信することで、視聴した市民が共感したり、その人から見た社会について考える機会を与えることで、地域全体で孤独・孤立対策を推進した。ポッドキャストは公開収録とし、さらに、放送後収録場所において交流会を開催することで、まち中の交流拠点づくりも合わせて行った。ポッドキャストや交流会についての情報発信と支援団体やその活動状況についての情報発信を合わせて HP 等で実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>市民に対して孤独・孤立対策や市民の多様性について発信すること、誰でも立ち寄れる市民の居場所を作ること。これらにより、潜在的な孤独・孤立を抱える方の掘り起こし、予防的な対策を行う。</li> <li>支援団体同士が定期的に接点を持てる場所をつくり、支援団体のつながり、情報発信の支援を行うこと。</li> </ul>	9月下旬～2月	コネクトスポット (290万円)
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 11回の公開収録を行い、のべ114名が参加した。公開収録には関係者以外にも学生や一般市民などの来場があった。また、収録後の交流会は支援者同士が交流する機会にもなった。</li> <li>✓ 岡崎市民だけでなく、市外の人からもポッドキャストを聴いて、「共感した」といった反響があった。</li> </ul>		
②	ポッドキャストの広報活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストの実施にあたっての広報を行った。具体的にはチラシ、ステッカーを1,000部印刷し、岡崎市役所や関係機関、NPO法人などのPF参画団体の施設において配布した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストの周知啓発を行い、視聴者数、公開収録、交流会への参加者数を増やすこと。</li> </ul>	9月	シテン (110万円)
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ ポストカード型のチラシ、ステッカーとし、特徴的なデザインとすることで、役所に配置したのを見た市民から「見たことがある」とコメントをもらうなど、印象付けることができた。</li> </ul>		

③	岡崎モデルの検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>有識者への委託を行い、先進地や地域内のフィールドワークを行った。結果を踏まえて、岡崎らしさや岡崎ならではの今後の取組について検討整理し、岡崎らしい孤独・孤立対策としてPFやポッドキャストの運営の見直しを行う材料として整備した。</li> <li>成果物を使用して、PF設立フォーラムにおいて朗読を実施することで、来場者の孤独・孤立に対する理解を深めた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>有識者の視点から検討してもらうことで、孤独・孤立やまちづくりにおける岡崎らしさについて把握し、現在の取組の見直しや、次年度以降の取組の検討に活用すること。</li> </ul>	9月下旬～2月	あさの研究所(66万円)
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 調査結果をPF設立フォーラムにて報告するとともに、PFに対して一人一人が社会を変えていく必要性について問題を提起した。</li> <li>✓ 今後も調査を拡大しつつ、結果を伝えていくことが必要と示された。</li> </ul>		
④	PF設立フォーラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内施設において、PF設立フォーラムを開催した。支援者、NPO、民生委員等の支援団体を対象に開催し、有識者による講演で孤独・孤立の課題についての理解を広めるとともに、PFのあり方や考え方について支援団体への周知を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体の孤独・孤立の課題やPFについての理解を深め、共通認識を持てるようにすること。</li> <li>支援団体同士が一体感をもって支援に臨めるようにPFの連帯感を醸成すること。</li> </ul>	2月21日(金)	謝金+交通費(13万円)
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ グループワークの中では、包括支援センターと民生委員がもっと連携できると良いなどの支援者連携についての意見が支援者から発言されるなど、支援者による主体的な意見交換が行われた。</li> </ul>		
⑤	孤独・孤立対策のロゴ制作	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストとその広報活動によりイメージの周知がなされたことを踏まえ、共通のイメージで行政の孤独・孤立対策を推進するため、統一感のあるデザインで孤独・孤立対策のロゴを制作した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立対策に一体的に取組んでいるイメージを与えること。</li> </ul>	2月	コネクトスポット(4万円)
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ ロゴを制作し、ポッドキャストと共通のデザインで制作することで既に広まったイメージを活用した。PF設立を伝える際に、のHPに掲載した。</li> <li>✓ 市職員からは、「岡崎市のイメージと「こどく・こりつ」をかなで表記したデザインは、PF参加団体も使用しやすく市民が受け入れやすいものとなっている。」といった感想が得られた。</li> </ul>		

7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举

- ・ つながっている支援団体数は地域内では網羅的になってきたが、今後も少しずつ拡大予定
- ・ 今後は、今つながっている支援団体とのつながりを強化することが課題。緩やかなつながりであることは重要だが、弱くて忘れられるようなつながりではいけないため、HP「つなぎめ」を“情報を伝えるツール”として頻度高く活用してもらえるツールにしていくとともに、行政が中間支援団体とともに支援団体を訪問するなど積極的に動いていく。

8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響

- ・ ポッドキャストについては、岡崎市民だけでなく、市外の人からもポッドキャストを聴いて、「共感した」といった反響があった。
- ・ チラシ、ステッカーを特徴的なデザインとすることで、市役所に配置したものを見た市民から「見たことがある」とコメントをもらうなど、印象付けることができた。

#### 4. 連携 PF の行程および実務上の留意点

【PF 立ち上げまでの行程】※令和6年度から孤独・孤立対策を実施

R6 年度	(ア)初期段階	
4月 ～	主担当部署の設定	■分野横断的な窓口をもつ部署が担当
4月 ～	担当者の初動	■PF のイメージについて庁内で共有・確認 ■当初より持っていた課題を孤独・孤立対策の観点で考える
	(イ)準備段階	
4月 ～	地域の現状把握	■中間支援団体と連携し、地域の現状を把握
4月 ～	取組テーマ決定	■中間支援団体と議論し、取組テーマを決定
4月 ～	連携 PF の 企画・設計	■PF の支援団体をつなぐために「つなぎめ」の HP を活用することとした ■市民への情報発信と居場所づくりをポッドキャストで実施することとした
4月 ～	関係団体の リストアップ(庁内)	■庁内では、なんでもありにならないように留意しつつ連携部署とは相互に 協力する関係性を構築
4月 ～	関係団体の リストアップ(庁外)	■当初より HP「つなぎめ」に登録している団体をメンバーとすることとし、登 録団体を庁内のつながりや、中間支援団体の営業によって拡大
9月 ～	地域の現状把握	■有識者と連携して、フィールドワークに基づく現状把握を実施
	(ウ)設立段階	
9月 ～	域内住民・団体への 情報発信	■ポッドキャストのチラシを特徴的なデザインとすることで認知拡大 ■ポッドキャストをアプリで公開し、アーカイブを残す
9月 ～	連携 PF の運営	■市役所と中間支援団体が共同で企画・運営を行う ■ポッドキャストの公開収録と交流会を2週間に1回の開催
	(エ)自走段階	
今後	PF の拡大・活性化	■今後はつながりの強化のために「つなぎめ」の活用促進を進める ■実態調査の結果を市民にも公開し、孤独・孤立対策を考える機会を提供し ていくことも検討

【それぞれの段階での留意点】

(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	<p>■分野横断的な窓口をもつ部署が担当</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立は分野横断的に動くため、横断的に相談を受け付けるふくし相談課が担当することとなった。</li> </ul>
②	担当者の初動	<p>■PFのイメージについて庁内で共有・確認</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>PFについては、支援団体同士がつながる、連携を強化するという目的や、会議体を新たに設けるものではないというイメージが職員の中で共通にあった。</li> </ul> <p>■当初より持っていた課題を孤独・孤立対策の観点で考える</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>相談受付において、もっと早く相談窓口を見つけられる環境が必要であるが、行政のHPは“求めるものが明確ではないと適切な窓口を見つけられない”という情報発信への課題意識があった。</li> </ul>

(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	<p>■中間支援団体と連携し、地域の現状を把握</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>当初の活動でもある程度は把握できていたが、中間支援の役割をする団体と連携することでさらに多くの課題を把握することができた。</li> </ul> <p>■有識者と連携して、フィールドワークに基づく現状把握を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>実態調査を実施するにあたり、有識者に手法を相談した。有識者から、フィールドワークを行い、市民の実態、特に市民一人ひとりがもつ周辺社会を把握し、共有する手法を提案してもらい、有識者と共に実施した。</li> </ul>
④-1	取組テーマ決定	<p>■中間支援団体と議論し、取組テーマを決定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和6年4月)重層において居場所づくりや地域づくりまで実施しているなかで、孤独・孤立についてはより予防的な活動を検討。官民連携においては両者がやりたいことの重なりを重視し、支援団体同士をつなぐ中間支援団体と議論し、「つなぎめ」サイトの活用やポッドキャストでの孤独・孤立対策のアイデアを得て実施することとした。</li> </ul>
④-2	連携PFの企画・設計	<p>■PFの支援団体をつなぐために「つなぎめ」のHPを活用することとした</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>「つなぎめ」のサイトをすでに運用しており、「つなぎめ」を起点として、支援団体同士の情報連携、支援団体の情報収集の場としていくこととした。</li> </ul> <p>■市民への情報発信と居場所づくりをポッドキャストで実施することとした</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストにより、市民への情報発信を行うとともに、実施後の交流会で支援団体同士のつながりづくりができるようにする。</li> </ul>
⑤	関係団体のリストアップ 初期メンバーへの声掛け	<p>■なんでもありにならないように留意しつつ連携部署とは相互に協力する関係性を構築</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>重層よりも枠組みが広いため、なんでも孤独・孤立と言ってしまうが、単なる人が集まるイベントにならないように庁内連携においては留意し声掛けをした。福祉分野以外でも多様性社会の実現を目指す部署等には声掛けをした。お互いの企画するイベントには参加するなど庁内でも関係性を構築している。</li> </ul>
		<p>■当初よりHP「つなぎめ」に登録している団体をメンバーとすることとし、登録団体を庁内のつながりや、中間支援団体の営業によって拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>(令和3年～)登録団体の拡大については、中間支援団体の営業活動で拡大している。HP「つなぎめ」に登録した団体をメンバーとしてPFを立ち上げた。</li> <li>(令和3年～)行政からも各担当課に「つなぎめ」に登録すべき団体を募集し、各課つながりのある機関を整理した。</li> </ul>

(ウ) 設立段階		
⑥	域内住民・団体への情報発信	<p>■民間が運営していた HP を共同運営する形で情報発信を実施</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ (令和 3 年)課題意識のあった情報発信については、わかりやすい情報発信をしている「つなぎめ」を見つけ、コネクスポットに声掛けをし、共同運営を開始。</li> </ul> <p>■ポッドキャストをアプリで公開し、アーカイブを残す</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ポッドキャストはアプリでいつでも誰でも聞けるように公開し、アーカイブを残している。</li> </ul> <p>■ポッドキャストのチラシを特徴的なデザインとすることで認知拡大</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ デザインが得意な団体に依頼し共通デザインを制作。活動に一体感を出すとともに、「見たことがある」と印象付けることができた。</li> </ul>
⑦	連携 PF の運営	<p>■「つなぎめ」のサイトは行政と中間支援団体の官民共同運営</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「つなぎめ」のサイト上での情報連携や支援団体同士が情報を知り合える場として活用を促していく。</li> </ul> <p>■ポッドキャストの公開収録と交流会を2週間に1回の開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 共感を生むことでつながりを感じることができるツールとしてポッドキャストでの情報発信、居場所づくりを継続する。</li> </ul>

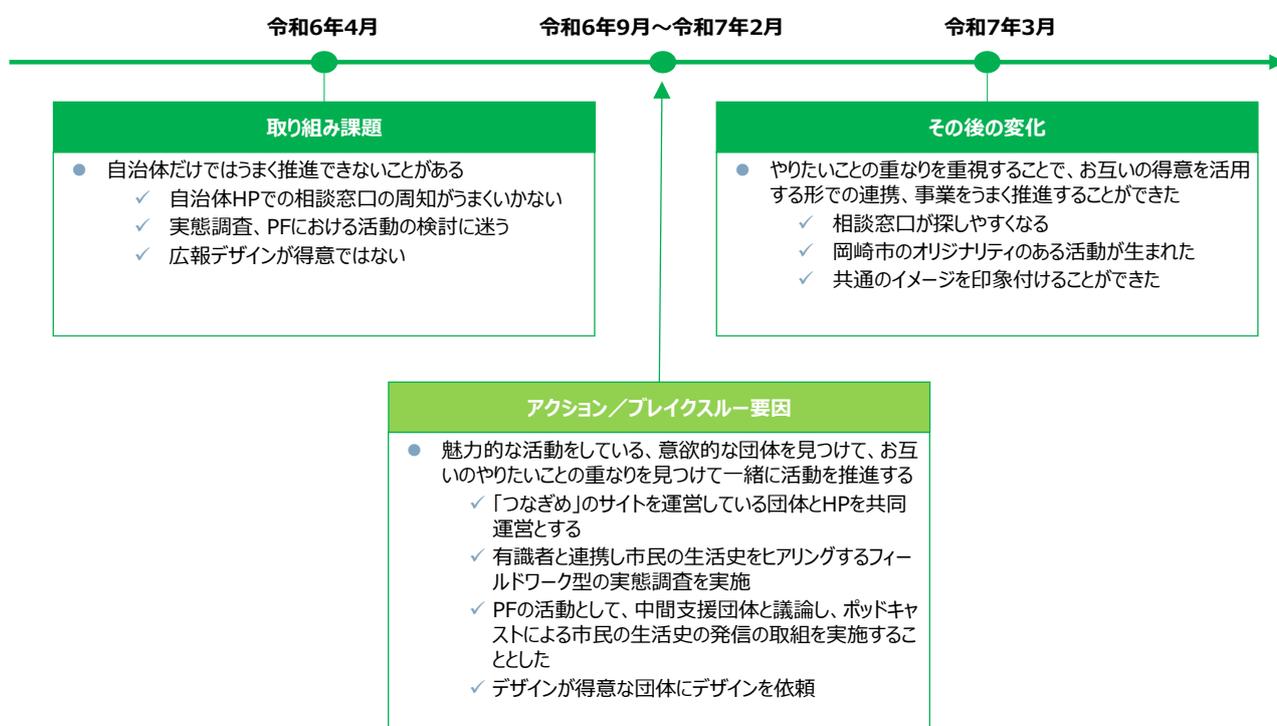
(エ) 自走段階		
⑧	地域協議会の設置	<p>■地域協議会の機能は重層の支援会議が担う</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 重層的支援体制整備事業における重層的支援会議が協議会の役割を担う。そのため孤独・孤立対策は予防的な観点、潜在層の掘り起こしを担い、支援が必要な対象者を PF メンバーで支援するとともに、必要に応じて、重層的支援会議につなぐ機能を担う。</li> </ul>
⑨	PF の拡大・活性化	<p>■今後はつながりの強化のために「つなぎめ」の活用促進を進める</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ つながっている支援団体数は地域内では網羅的になってきたが、今後も少しずつ拡大予定</li> <li>・ 今後は今つながっている支援団体とのつながりを強化することが課題。緩やかだが、弱くて忘れられるようなつながりではいけないため、「つなぎめ」を情報を伝えるツールとしても活用することで利用を促進し、行政が中間支援団体とともに支援団体を訪問するなど積極的に活性化を図る。</li> </ul> <p>■実態調査の結果を市民にも公開し、孤独・孤立対策を考える機会を提供していくことも検討</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 市民ひとりひとりが地域社会のあり方を考え直す機会となるように、生活史の調査も継続し、実態を地域で可視化することも検討していく。</li> </ul>

## ブレイクスルー要因

### アクション/ ブレイクスルー要因

#### ■自治体だけでなく、民間の得意に頼る

- ・ それぞれ行政、民間に得意なことがあるため、自治体においてうまく推進できないことについては、検討段階から民間や有識者に相談し、議論しつつ実施事項や方針を決める。
- ・ 民間団体に対しても押し付けるわけではなく、民間団体の“得意なこと”や“やりたいこと”を聞き取り、同じ目的で進められる“やりたいこと”の重なりを見出して、連携体制を構築する。
- ・ 今回のモデル事業以前から、自治体のHPではうまく支援情報を伝えられない課題に対して、HPでわかりやすく情報を発信している中間支援団体を見つけ、HPの共同運営を行うこととするなどの取組を実施。
- ・ 今回の実態調査やポッドキャストについても民間団体や有識者と連携し、議論する中でオリジナリティのある取組を行うことができた。
- ・ 広報デザインについても、まちづくりに取組むデザインを得意とする企業と連携することで、印象に残る共通のイメージを作成することができた。



## コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携 PF の重要性～

### NPO法人 コネクトスポット

- ・ 岡崎市において、支援団体の情報を集約する HP「つなぎめ」を単独で立ち上げ、運営。支援団体のコーディネーター、中間支援団体として活躍。当事者が迷わずに支援にたどり着けるよう支援情報を発信、適切な支援につなぐなど支援団体同士の横のつながりづくりも支援する。岡崎市からの声掛けを受けて、「つなぎめ」を共同運営するようになる。
- ・ 今回のモデル事業では、ポッドキャストによる情報発信、居場所づくりを岡崎市とともに企画。代表の山下氏は公開収録の会場であるマイクロホテルアングルの飯田氏とともにラジオのパーソナリティ、運営を担う。

#### 📍 草の根の支援団体をつなぐポータルサイト、コーディネーターの必要性

- ・ 小さな支援団体は日々活動や存続を守ることです。そのため、ポータルサイトがほしいと思っても単体では立ち上げられないケースが多い。また、ポータルサイトがあることで、小さな団体は対象者に安心感を与えられるメリットがある。行政が実施するニーズはあると思う。
- ・ また、支援団体単体では適切な支援につなぐことができなかつたり、最悪の場合対象者の取り合いや囲い込みが発生したりする可能性もある。コーディネーターや中間支援団体の役割は重要である。

#### 📍 デザインの力をつけてまちに出ていく

- ・ 精神科や相談窓口はまだ特別なところであり、メンタルケアはまちの中でできると良いと考えている。まちの中に出ていくためには、工夫が必要と考え、デザイナーと組んで仕事をしている。想いを伝えられるように文章におこして、プロのデザイナーにビジュアルに起こしてもらうことで、マーケットに活動を伝えることができる。まちなかのメンタルケアにもなるようなデザインのショップカードを配布している。おしゃれで目を引くデザインにすることでカフェにも置いてもらえるようになった。

#### 📍 PF の推進においては、共通で向き合う課題が必要

- ・ 支援者は多忙で集まる場にはなかなか来てもらえない。場に来てもらうにはインセンティブが必要で、単なるフォーラムや会議には参加したいとは思わない。PJT 型で共通で向き合う課題があって、行政と連携することで共感を持てる課題の解決につながる議論・活動ならば対話したいと思う。
- ・ 支援団体としても、行政だけで課題を解決しなくてもいいと思っている。企画段階など早めに対話することが重要。困難になってから相談されても対応できない。空き家対策などお題は福祉以外でもよく、行政が投げかけた問に対して、PF みんなで考えていけると良いのではないかな。

#### 📍 行政の強みは地域全体への発信力と住民とのつながり、信頼性、お互いの強みを活かせる連携方法を

- ・ 行政は市民の情報を持っており、地域全体に発信する力を持っている点は強みである。また、行政と連携することでお墨付きがもらえ、信頼性があがることも民間団体にとってはメリットである。
- ・ 一方で、目の前の人を守るために日々誇りをもって活動しているため、行政の下請けとして行政の指示を受けて活動を制限される可能性を危惧し連携に抵抗がある団体もいる。委託事業としてしまうと発注者と受託者という関係性になるため、連携方法をよく検討する必要がある。
- ・ それぞれの強みを活かした活動が検討する際には、行政と民間という立場ではなく、「僕」と「あなた」で「なんのために」「なにをするのか」を議論することで、目的にあった取組を考えることができる。考えたものに対して何が足りないのか、本当にお金が必要なのかを後から考える方が良い。



官民連携の形に明確な答えはなく、  
地域の数だけ形があると感じます。  
他の事例を参考にしつつも  
自分たちが持つユニークさを追求し、  
それを活かした連携を  
これからも模索し続けていきたいと思ひます。

NPO 法人コネクトスポット  
代表 山下祐司

5.自治体等との打合せ記録一覧				
No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	8/5(月) 10:00-11:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	
		NPO 法人 コネクトスポット	山下様	
2	9/5(木) 16:00-17:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	
3	10/30(水) 14:00-15:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	
4	10/31(木) 18:00-19:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	
		NPO 法人 コネクトスポット 合同会社 シテン	山下様 飯田様	
5	1/14(火) 09:00-10:00	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	
6	2/4(火) 13:00-15:00	NPO 法人 コネクトスポット	山下様	
7	2/4(火) 15:30-17:30	岡崎市 福祉部 ふくし相談課	齊藤様、寺西様、永田様	
8	2/12(水) 15:00-17:00	愛知学泉大学	古橋様	

## 自治体による従前からの取組

### ■ 孤独・孤立対策支援ポータルサイト「つなぎめ」の共同運営

(取組概要)

令和3年度より孤独・孤立の問題に悩む人が容易に相談先などの情報を収集できるように、福祉サービスの統一的なポータルサイトとして「つなぎめ」をNPO法人コネクトスポットと共同運営している。

図表「つなぎめ」トップ画面



(出典:<https://tunagime.jp/>)

図表「つなぎめ」支援検索画面



(出典:<https://tunagime.jp/supporter/>)

試行的事業	
① ポッドキャストと交流会	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャスト「こどくのあわい」では、毎回市民や支援者をゲストに呼び、その人の今までの人生やその時の思いについてラジオ形式で発信する。誰かの生活史を発信することで、視聴者が共感し、勇気をもらったり、社会について考えたりする機会を提供することで、地域全体での孤独・孤立を予防していくことを目指す。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立対策や多様性、誰かの生活史を発信することで、孤独・孤立対策の認知拡大だけでなく、潜在的な孤独・孤立を抱える人やその隣の人に勇気を与えたり、支えになったり、少し考えてもらうきっかけにもらえるように設計した。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>音声のみのラジオとすることで、負担感を軽減し、継続性を高めた。また、ゲストが匿名で登場することもできる設計とした。</li> <li>公開収録の形式をとり、収録後に交流会を開催することで、まち中の交流拠点づくりを行った。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>11回の公開収録を行い、のべ114名が参加した。公開収録には関係者以外にも学生や一般市民などの来場があった。また、収録後の交流会は支援者同士が交流する機会にもなった。</li> <li>岡崎市民だけでなく、市外の人からもポッドキャストを聴いて、「共感した」といった反響があった。</li> </ul>

#### (実施概要)

Spotify のアプリで聴けるポッドキャストで、ラジオ形式で収録した音声を配信している。顔出しをしないラジオ形式とすることで、動画配信よりも負担を減らして、継続的に実施できるように工夫した。

メインパーソナリティは、NPO 法人コネクトスポットの山下氏と開催拠点であるマイクロホテルアングルの飯田氏で、毎回岡崎市民を中心に多様なゲストを呼び、その人の今までの人生“生活史”について話す。

ゲストに生活史としていままでの人生やその時の思いを振り返って話してもらうことで、視聴者の共感と呼び、誰かの勇気や支えになる。また、その人の目線での社会をみんなで共有することで、社会のあり方について視聴者が考え、孤独・孤立を生みにくい社会についてみんなで考えるきっかけとなる。開催結果は「つなぎめ」のサイトで報告、紹介している。

公開収録を、岡崎市のウォークアブルなまちづくりを推進する QURUWA 地区の一画で行うことで関心を持った市民や通りがかりの市民、支援者などが自由に立ち寄ることができる交流拠点づくりも併わせて行う。公開収録後は「あわいスタンド」として交流会を開催する。

図表 公開収録の風景



図表 収録の記録

回数	日付	ゲスト
#0	9月26日	岡崎の孤独の調査に取組む愛知学泉大学の古橋敬一氏
#1	10月10日	人生で3ヶ月以上、岡崎を離れたことのない方
#2	10月31日	長年続く洋菓子屋岡崎の洋菓子屋さんに嫁いだ方
#3	11月14日	岡崎で長年続く石屋で石造りに取組む四代目の職人さん
#4	11月21日	岡崎の山間部、額田で酒蔵を営んでいる方
#5	12月12日	岡崎で家族でぶどう園を営んでいる方
#6	12月19日	岡崎で20年以上、建築現場に関わってきた大工さん
#7	1月9日	岡崎で10年間、ママさんの産前産後の暮らしをサポートしてきた方
#8	1月23日	岡崎で16年、ベーコンやハムなどの手作り店を営んできた方
#9	2月13日	10年以上勤めた会社から独立・起業し、山間部の課題解決に取組む方
#10	2月27日	岡崎でフランス流の食堂を営む方

#### 企画者の意図

**“ありのままがいい”ことをメディアで発信することで、みんなでいいまちをつくっていく**

自殺相談などはすぐに対応が必要で、窓口や居場所が必要になるが、孤独・孤立対策では、グレーゾーンの人、すぐには相談に来ない人たちへのアプローチが必要だと考えた。メディア事業を担う自分たちならばできることとして、孤独・孤立は悪いことではなく、そのままでもいい、ありのままでもいいことを発信するメディアがあれば、誰かの勇気や支えになれるのではないかと考え今回のポッドキャストでの発信を考えた。当事者には届かなくてもその隣の人に伝えられれば少しずつありのままを認められる社会がつかれる。短期的に目に見える効果が見えるものではないが、重要な取組であると考えている。

② ポッドキャストの広報活動	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストの実施にあたり、広報活動としてチラシとステッカーを 1,000 部印刷し、岡崎市役所や関係機関、NPO 法人などの PF 参画団体の施設で配布した。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストの周知啓発を行い、視聴者数、公開収録、交流会への参加者数を増やすこと。</li> <li>岡崎市の孤独・孤立対策を広く周知していくこと。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵葉書のような特徴的なデザインで、説明は裏面に記載することで、福祉関係の施設以外にも置いてもらいやすく、思わず手に取りたくなるようなポストカード型のチラシと、共通のデザインのステッカーを制作した。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポストカード型のチラシ、ステッカーとし、特徴的なデザインとすることで、市役所に配置したものをみた市民から「見たことがある」とコメントをもらうなど、印象付けることができた。</li> </ul>

チラシはポストカードサイズで、表面にはタイトルとイラストのみのデザインとなっており、ポップなデザインでカフェ等においても違和感がなく、手に取りたくなるように工夫されている。ポッドキャストの画面でも同一のデザインが表示される。裏面には、ポッドキャストの説明として「孤独感にそっと寄り添う」メッセージを記載し、ポッドキャストへのアクセス用の QR コード、収録を行う場所を記載している。ステッカーもチラシと同じデザインとなっている。

図表 チラシのデザイン(表面)



図表 チラシのデザイン(裏面)

# こどくのあわい

## 岡崎という街の生活史

このラジオでは、岡崎という街で暮らす様々な人たちの物語を通じて、私たちが抱える孤独感にそっと寄り添っていきます。

この街には、いろいろな背景を持つ人が暮らしています。

年齢、性別、職業、心身の状態が違うそれぞれの人々が、岡崎という場所でどのように生きてきたのか。

その生活の中には、嬉しかったこと、悲しかったこと、どうしようもない孤独を感じた瞬間があるでしょう。

私たちは、その人たちの話に耳を傾けることで、この街が持つ多様な姿に気づくことができるかもしれません。

そして、それが少しでも、あなたが感じている孤独を和らげるきっかけになればと思っています。

主催 岡崎市役所ふくし相談課 / 受託 コネクトスポット / 企画 合同会社シテン

話を聞く人  
NPO 法人  
コネクトスポット代表  
山下祐司  
合同会社シテン代表  
飯田圭

話をする人  
岡崎市に暮らすあの人

収録地  
Micro Hotel ANGLE

ラジオを聴く



つなぎめを知る



図表 ステッカーのデザイン



③ 岡崎モデルの検討	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>愛知学泉大学の古橋敬一氏と連携し、フィールドワークによる実態調査を行った。手法として、インタビューを軸にした質的調査を行うことで、現代的な「孤独・孤立」の実態を把握し、対象者の視点から見た岡崎市を把握、整理した。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>対象者へのヒアリングを実施し、有識者の視点から整理してもらうことで、現代の孤独・孤立の実態やまちづくりにおける岡崎らしさを把握し、現在の取組の見直しや、次年度以降の取組の検討に活用する。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>アンケート調査による定量的なデータでは見えてこない、個人を取り巻く社会の様子を知ることができる手法を採用したこと。</li> <li>手法の検討段階から有識者と相談し、連携して調査を実施した。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>調査結果を PF 設立フォーラムにて報告するとともに、PF に対して一人一人が社会を変えていく必要性について問題を提起した。</li> <li>今後も調査を拡大しつつ、結果を伝えていくことが必要と示された。</li> </ul>

(実施概要)

アンケート調査等の従来の実態調査では、社会の視点から支援対象である孤独・孤立の当事者の定量的な情報を把握する。一方で、今回の調査では、誰でも孤独になるタイミングがあるという前提のもと、いち市民の目線からその状況や思い、周りの社会を把握することで、現代の孤独・孤立について把握することを試みた。結果を踏まえて、岡崎らしさや岡崎ならではの今後の取組について検討整理し、岡崎らしい孤独・孤立対策として PF やポッドキャストの運営の見直しを行う材料として整備した。

図表 調査手法の違いのイメージ



調査の実施記録は以下の通り

図表 調査の記録

区分	回数	調査内容
県外視察	1回	1月17日に静岡県浜松市にあるNPO法人クリエイティブサポートレッツ(以下、レッツ)を視察訪問し、その結果を報告書として取りまとめた。視察の結果として、支援ありきではなく、支援する側の自己変革の機会として社会としての私たち一人ひとりが変わることが求められているといった考察がなされた。
岡崎市内の視察	13回	13名の人々にインタビューを実施し、それぞれの結果を要約、報告書として取りまとめた。ニーズを丁寧に把握することの重要性が示されるとともに、孤独・孤立に対して問題解決としてのアプローチだけでなく、当事者、支援者、その他の関係者がフラットにネットワークを広げて、社会の制度やシステムの欠陥を埋めつつ社会のあり方を考え直すというアプローチの必要性が示唆された。
コミュニティラジオへのアドバイス	5回	支援ありきではない当事者、支援者が気軽に情報に触れ、主体的にネットワークにアクセスできるプログラムとして、ポッドキャストの取組が評価された。

④ PF 設立フォーラム	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>市内施設において、PF 設立フォーラムを開催した。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援団体が孤独・孤立の課題や PF についての理解を深め、共通認識を持つこと。また、支援団体同士が一体感を持って支援に取り組めるように、PF の連帯感を醸成すること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援者や NPO、民生委員等の支援団体を対象に、有識者の講演を通じて孤独・孤立の課題についての理解を広め、PF のあり方や考え方を周知した。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>グループワークの中では、包括支援センターと民生委員がもっと連携できると良いなどの支援者連携についての意見が支援者から発言されるなど、支援者による主体的な意見交換が行われた。</li> </ul>

(実施概要)

開催概要は以下のとおりである。

【日付】令和7年2月21日(金)

【場所】岡崎市康生通西4丁目71番地 図書館交流プラザりぶら ホール

【参加者】岡崎市の PF 参画団体、岡崎市内の支援関係団体

【目的】

- ・岡崎市の孤独・孤立対策官民連携 PF が設立されたことを周知すること
- ・PF 参画団体が孤独・孤立についての理解を深める機会をつくること
- ・PF 参画団体がつながるきっかけをつくること

【内容】

時間	内容			
14:00	オープニングアクト	講演者	舞台俳優	三村 聡 氏
14:10	オープニングトーク	講演者	NPO 法人 コネクトスポット 理事長	山下 祐司 氏
14:15	実践発表1	講演者	一般社団法人 Mi-Project 代表	松村 大地 氏
14:30	実践発表2	講演者	キッチンカー 「蟬(せみ)」代表	安藤 梢 氏
14:45	PF 交流会説明	説明	合同会社シテン 代表社員	飯田 圭 氏
14:50	PF 交流会①	ファシリ テーター	一般社団法人 Mi-Project 代表	松村 大地 氏
			厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域共生社会推進室支援推進官	犬丸 智則 氏
			NPO 法人 コネクトスポット 理事長	山下 祐司 氏
			合同会社シテン 代表社員	飯田 圭 氏
			岡崎市	永田 享之 氏
15:10	休憩・移動			
15:15	実践発表3	講演者	厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域共生社会推進室支援推進官	犬丸 智則 氏
15:30	PF 交流会②	ファシリ テーター	※交流会①と同一	
15:50	エンディングアクト	講演者	舞台俳優	三村 聡 氏

三村 総 氏による舞台公演



三村氏によるオープニングアクトでは、星野源氏の入院時代の一説を引用し、病床に倒れて誰に会っても劣等感を感じて孤独になってしまう自分が、自分のことを知らない、一生会うこともない SNS 上の新しい友人との SNS 上のほんの少しのやり取りでつながりを感じることができたエピソードを芝居として上演することで、フォーラムの内容に来場者を引き込み、“つながりとはなにか”を考えさせるきっかけをつくっていただいた。エンディングアクトでは、岡崎市が試行的事業で実施した孤独の実態調査「岡崎の孤独に会いに行く」の一部と、調査を実施した古橋氏の考察を朗読した。ヒアリングを受けた方の「僕って孤独なんですか？」や「時間の進み方が違うのかなど」などの本人目線での言葉とそこから見た社会を知ることで、来場者が自分を含めた社会のあり方を考え、それぞれの人生を尊重し、互いに応援し、支えあうつながりの重要性について伝えていただいた。

一般社団法人 Mi-Project 代表 松村 大地 氏による講演



松村氏が実践する多様な居場所づくりの事例として「鉄塔の下の倉庫」や「駄菓子ばあひまわり」を紹介し、地域に開いて、地域住民がつくる居場所づくり、当事者が自分もここにいてよいと思える多様な居場所の重要性を伝えていただいた。多様な居場所づくりのきっかけや途中経過を紹介いただくことで、支援団体においても参考になる工夫点を多く紹介いただいた。

キッチンカー「蟬(せみ)」代表 安藤 梢 氏による講演



本人の結婚、流産、闘病の経験を踏まえて、自身が感じた孤独やそれを乗り越えられたエピソードを伝えていただき、その経験から必要だと思い始めたがん患者のための居場所づくり、コミュニティづくりについて、当事者だからこわかる居場所に求めることを紹介していただいた。居場所づくりをする支援者としてだけでなく、当事者としての想いやエピソードを伝えていただくことで、支援者が独りよがりにならずに当事者目線での居場所づくり、支援が重要であることが伝えられた。想いのこもった講演に会場では涙を流す人が多くいた。

厚生労働省社会・援護局地域福祉課 地域共生社会推進室支援推進官 犬丸 智則 氏による講演



当事者にとっての居場所はその人それぞれで異なるため、居場所の形はツールにすぎず、多様な居場所が存在することが重要であることを講話いただいた。居場所は困ったときに行くのではなく、気づけばそこであって、普段からそこにいてよい、落ち着けると思える場所やものであり、多様な居場所があるためにはそれぞれ自身が起点となって居場所をつくっていくことが重要であると事例を交えて紹介いただいた。

交流会においては、各テーブルにファシリテーターが入り、「孤独・孤立とは何か」、「どんなことが必要か」、「私たちに何ができるか」などのテーマで、参加者同士が対話を行った。参加者からは、「つながりが重要である」といった意見や、「支援者同士が協力することが必要」といった意見が出された。

図表 交流会の様子



令和6年11月吉日

〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-2  
大手町フィナンシャルシティグランキューブ  
株式会社 野村総合研究所

「岡崎市 孤独・孤立対策PF設立フォーラム（仮称）」における  
ファシリテーションの依頼について

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素より格段のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

このたび、岡崎市では、内閣府の地方版孤独・孤立対策官民連携プラットフォーム推進事業を実施しております。その一環として、孤独・孤立の問題について、支援者同士がつながり、孤独・孤立の理解を深めるとともに、広く岡崎市民に対し孤独・孤立対策の推進を周知していくための、「岡崎市 孤独・孤立対策PF設立フォーラム（仮称）」を開催いたします。つきましては、上記フォーラムにおける交流会のファシリテーションをお願いいたします。

記

- 1 「岡崎市 孤独・孤立対策PF設立フォーラム（仮称）」における交流会のファシリテーション
- 2 開催日時：令和6年2月21日（金）14:00～16:00
- 3 場所：岡崎市康生通西4丁目7番地 図書館交流プラザりぶら ホール
- 4 謝金：謝金単価 11,400円×2時間 22,800円
- 5 担当者連絡先  
株式会社 野村総合研究所 社会システムコンサルティング部  
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-9-3  
大手町フィナンシャルシティ グランキューブ  
電話番号：[REDACTED] e-mail：[REDACTED]

⑤ 孤独・孤立のロゴ制作	
概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポッドキャストとその広報活動によりイメージの周知がなされたことを踏まえ、共通のイメージで行政の孤独・孤立対策を推進するため、統一感のあるデザインで孤独・孤立対策のロゴを制作し、岡崎市の孤独・孤立対策を発信するアイコンとして使用することとした。</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立対策に一体的に取り組んでいるイメージを与えること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>ロゴ制作において、共通のイメージで行政の孤独・孤立対策を推進するため、統一感のあるデザインとした。</li> <li>岡崎市の孤独・孤立対策を発信するアイコンとして使用することとした。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>ロゴを制作し、ポッドキャストと共通のデザインで制作することで既に広まったイメージを活用した。PF 設立を伝える際に、の HP に掲載した。</li> <li>市職員からは、「岡崎市のイメージと「こどく・こりつ」をかなで表記したデザインは、PF 参加団体も使用しやすく市民が受け入れやすいものとなっている。」といった感想が得られた。</li> </ul>

ポッドキャストと共通のデザインでの岡崎市の孤独・孤立対策のアイコンを制作し、「つなぎめ」のサイトで岡崎市の孤独・孤立対策官民連携 PF の設立を発信、アイコンを掲載し、イメージを普及した。サイト上では、参画団体の一覧も閲覧可能。ポッドキャストの情報発信、報告も合わせて実施することで情報を一元化している。

図表 制作したロゴ



## 2-3. 春日井市

No.	3	春日井市
-----	---	------

1. 取組の全体像					
1. 自治体の概要					
①	自治体名	春日井市	②	担当部局名	健康福祉部 地域共生推進課
③	人口	308,681(人) <令和2年10月/国勢調査>			
④	自治体内連携	庁内連携部局(メイン)	健康福祉部地域共生推進課・健康増進課・障がい福祉課・生活支援課、市民生活部市民生活課・多様性社会推進課、こども未来部子育て推進課・こども家庭支援課・保育課、教育委員会学校教育課		
		庁内連携内 ※会議体、情報共有	・市民生活の相談窓口を設置する課と孤独・孤立の課題を共有し、連携体制を構築		
		庁内連携部局(メンバー)	健康福祉部介護・高齢福祉課、市民生活部戸籍住民課・保険医療年金課、財政部収納課、まちづくり推進部住宅政策課、上下水道部上下水道業務課、市民病院医療連携室		
		庁内連携内容 ※会議体、情報共有	・孤独・孤立になりうる出来事に伴う手続き窓口を担当する課と孤独・孤立の課題について共有		
2. 形成をめざす地方版連携PFの姿					
①	従前の取組 ※重層の取組、外部組織連携、地域コミュニティ形成等	<ul style="list-style-type: none"> <li>重層的支援体制整備事業では、多機関協働による地域支援研究会を設置し、包括的な支援を担う人材育成に取組んでいる。</li> <li>高齢分野では、市独自の地域ケア会議の仕組みを活用し、住民が主体となり地域生活課題を解決する仕組みづくりに取組んでいる。</li> <li>昨年度1つの地域で、PFを立ち上げ取組を開始。</li> </ul>			
②	実現したい状態 ※構築する仕組み/支援対象の住民を取り巻く環境	今年度のゴール	<ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度立ち上げたPFを分析し、地域アセスメントの項目を整理し、新たに他の日常生活圏域でPFを立ち上げる</li> <li>PFは、市地域共生推進課と社会福祉協議会に配置する第2層生活支援コーディネーターの共同企画・運営とする</li> </ul>		
		最終的なゴール	<ul style="list-style-type: none"> <li>モデル地区での取組を横展開することにより、市全域で孤独・孤立に気づき、支える体制をつくる</li> </ul>		
3. 地方版連携PFにおける連携体制					
①	地方版連携PF (ニュータウンエリア官民連携PF)	立ち上げ年度	令和5年度		
		参画メンバー	居場所づくりの活動団体、NPO 法人、UR 生活支援アドバイザー、まちづくり会社、社会福祉法人、地区社協、民生委員児童委員、コミュニティナース、第2層生活支援コーディネーター		
		選出・打診時の工夫	第2層生活支援コーディネーターの協力により、居場所づくりを意欲的に行う活動団体を選出・打診		

②	地域版連携 PF (新規立ち 上げ予定)	立ち上げ年度	令和7年度(予定)
		参画メンバー	居場所づくりの活動団体、福祉関係事業者、民間企業、地区社協、民生委員児童委員、コミュニティナース、第2層生活支援コーディネーター(予定)
		選出・打診時の工夫	地域アセスメントにもとづき、そのエリアの核となる活動団体を選出し打診予定

#### 4. PF連携による価値や工夫\_考え方

- ・ 地域特性に応じたPFをつくるため、地域アセスメントを行い、共通の地域特性をもつエリアを単位とするPFを立ち上げる。令和5年度にモデル地区としてPFを立ち上げた藤山台・岩成台地区に加え、令和6年度は同じニュータウンであり隣接する高森台・石尾台地区まで拡大しニュータウン地区PFとして展開。
- ・ PFでは、福祉分野に限らず、居場所や交流を目的とした活動団体や地域活動に積極的な企業や社会福祉法人などに参加を呼びかける。
- ・ PFの運営は第2層生活支援コーディネーターを中心に市地域共生推進課が共同開催し、PF運営のノウハウを蓄積し、人材を育成しながら数年をかけて地域に根付かせる。

## 2. 連携PFイメージ

### 5. 連携PFのイメージ図



### 3. 試行的事業一覧

#### 6. 本年度に取り組む試行的事業の概要

試行的事業のポイント・工夫		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 孤独・孤立を市民やPF参加者が我が事化しやすいよう定義し直し、PFの参加者同士の関係づくりと予防的な活動に取り組むPFとした。</li> <li>・ 孤立予防の大切さについて啓発し、PFから生まれたつながりづくりのツールを活かして、PF参加者が市民へ広く周知する情報発信を行った。</li> </ul>			
	事業名称	事業内容	目的/期待効果・KPI	実施時期	発注先
①	PF拡大を目指した地域アセスメントの実施	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年度立ち上げた藤山台・岩成台地区のPFを、今後は市内全域へ水平展開していく。</li> <li>・ 水平展開の計画策定や地域・テーマ選定にあたって、地域のアセスメントシートを作成し、各地域のアセスメントを実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ PF拡大にあたって考慮すべき要素をアセスメントシートとして整理し、効果的なPF展開の戦略を立てること。</li> </ul>	9月4日 (水)ヒアリング実施  10月15日 (火)アセスメントシート作成	— 費用なし
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 第2層生活支援コーディネーターとの議論やアセスメントシートの作成により、各地域の特性や社会資源、さらにはPF立ち上げにあたっての課題を可視化した。</li> <li>✓ 各地域が持つ強みや地域特性、共通課題等を可視化することができたため、どの地域をどう纏めて、あるいは分けて、どのようなテーマでPFを立ち上げるべきか検討が進んだほか、他部門と調整・検討する際のツールにもなった。</li> </ul>		
②	生活動線上でのリーフレット配布	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年度公的な場所で配布を行った相談窓口リーフレットを、医療機関や薬局、理美容室、金融機関、スーパー等の住民の生活動線上で配布した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 公的機関や福祉施設に訪問しない市民に対しても、孤独・孤立の問題や相談窓口についての周知啓発を行うこと。</li> </ul>	9月20日 (金)納品  10月～配布	22万円 東栄株式会社
			<b>成果検証結果</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 全607箇所、全21,262枚設置した。</li> <li>✓ 配布先では、客との雑談中にぽろっと困りごとが零れた際に手渡すことができた、との声があった。</li> <li>✓ クリニックの待ち時間で手に取りやすく、特に精神科クリニックでリーフレットの配布数も多いという声があった。</li> </ul>		

<p>③</p>	<p>つながりづくりを推進するイベント</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>PF参加団体と共催で、孤独・孤立予防の展示、地域食堂等による弁当販売、福祉事業所の作品販売、フードパントリー、フードライブ、地域の小学生による演奏等のステージイベント、キッチンカーの出店等を実施した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域食堂などの市民の居場所や交流活動について、春日井市東部地域の市民を中心に広く周知すること。</li> <li>参加する市民に対して、孤独・孤立の問題を周知し、予防を啓発すること。</li> <li>住民同士がゆるくつながり、交流できる場をつくること。</li> </ul>	<p>12月15日 (日)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>会場費：7万 まちスイング</li> <li>イベント委託：58万円 有限会社イー・エフ・ピー</li> <li>イベント保険：4万円 株式会社東京海上日動パートナーズ 東海北陸</li> <li>消耗品：1万円 株式会社市原商店</li> </ul>
		<p>成果検証結果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 約 1,000 人の住民が来場した。</li> <li>✓ 子どもからお年寄りまで幅広くアプローチすることができた。</li> <li>✓ 来場者アンケートから、多くの来場者が、つながりづくりの活動に関心を持ったことが分かった。</li> <li>✓ 来場者アンケートでは、様々な人と出会い交流できる場となったことが好評であった。</li> </ul>		

④	「ゆるやかな つながりづ くり応援マ ップ」の作製	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 昨年度、藤山台・岩成台PFの参加者から生まれた「ぷらっとノート」をはじめとした、つながりづくりの活動紹介を掲載するマップ「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」を作製した。</li> <li>・ 紙媒体の配布だけでなく、春日井市 HP やPF参加団体の SNS などのデジタル媒体でも周知した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「ぷらっとノート」をはじめ、つながりづくりに取組む団体を、市民に広く周知すること。</li> <li>・ 藤山台・岩成台PFでのつながりづくりの取組である「ぷらっとノート」の活動を拡大すること。</li> </ul>	1月31日 (金)納品	33万円 木野瀬印刷株式会社
			成果 検証 結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 公的機関だけでなく、スーパーやスポーツクラブ、飲食店等にて約5,700枚のマップを設置予定で調整を進めており、現時点で約2,000枚を設置した。</li> <li>✓ マップを活用してPFへの新規参加団体を募る過程で、ノートの設置場所が新たに9箇所増えた。</li> <li>✓ 市民から、とても見やすい、マップを活用して困っている方に積極的に居場所を教えたい、初めてマップを見た市民からどのようなマップか複数質問があり関心を持ってもらえた、ニュータウンエリア以外の地域でもこのようなマップがあったらいい等の声があがった。</li> </ul>	

⑤	シンポジウムの開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「身近でゆる～いつながり」をテーマに、有識者による基調講演や、市内で居場所やつながりづくり活動を行う活動団体によるパネルディスカッションを行った。</li> <li>・「ぱらっとノート」の展示も行い、孤独・孤立には予防が大切であることの啓発やつながりづくり活動の周知を行った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 孤独・孤立は誰にも起こりうる身近な問題であることや、孤独・孤立を予防する取組について市民に広く周知すること。</li> </ul>	2月16日(日)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ チラシ: 21万円 木野瀬印刷株式会社</li> <li>・ 講演費: 28万円 まほうのだがしや チロル堂共同代表 吉田田タカシ様</li> <li>・ 謝金: 27万円 登壇者5名</li> <li>・ 消耗品: 2万円 市原商店</li> <li>・ お弁当: 7千円 ちいき食堂厨</li> <li>・ クリーニング: 2千円 中日本リネン</li> </ul>
		成果検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 159人が来場した。</li> <li>✓ アンケートの結果、93%が「身近な地域のつながりは大切だと感じた」、42%が「つながりづくり活動に参加してみたいと思った」と回答した。</li> <li>✓ つながりづくり活動の周知だけでなく、実際に支援活動をするきっかけや活動団体間の連携が図られた。</li> </ul>		

⑥	つながりサポーター養成講座の開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立を予防し、当事者を支援するために日常の中で何ができるのかを学び、「つながりサポーター」養成講座の講師を育成するための講座を開催した。</li> </ul>	つながりサポーター養成講座の講師を育成することで、今後市内にて「つながりサポーター」の養成を進める。	1月22日 (水)	3万円+交通費 一般社団法人 Shien 代表理事 山田 浩史氏
			成果検証結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>✓ 庁内他部署や社会福祉協議会等、計22人が受講した。</li> <li>✓ アンケートの結果、回答者の100%が周囲の困っている人を助けようと思ったと回答した。</li> <li>✓ 次年度以降のつながりサポーター養成講座の活用方法の検討が行われた。</li> </ul>	

**7. 次年度以降に向けた事業等の案 ※PDCA サイクルに照らして次年度以降に取り組んでいく事業イメージ(あれば)を列举**

- モデル地区を参考に市内他地域でPF立ち上げを継続し、市内全域に水平展開できる体制をつくる。
- モデル地区PFから生まれたノートやマップは、つながりづくり活動を行うツールとして活用する。

**8. 孤独・孤立対策を公表した際の反響**

- PFの活動を知った他の活動団体から、PFに参加したいとの申し出があった。
- つながりづくりを推進するイベント実施時に新聞の取材が行われた。

#### 4. 連携PFの行程および実務上の留意点

##### 【PF立ち上げから拡大までの行程】

実務上の留意点				
連携PFの行程	令和5年度	PFの立ち上げ	令和6年度	・昨年度PFの拡大 ・PF水平展開の検討
<b>(ア)初期段階</b>				
主担当部署の設定	8月	■幅広い領域に関わるテーマであるため、重層的支援体制整備事業や地域包括ケア等に取り組んできた「健康福祉部地域共生推進課」が担当	—	—
担当者の初動	11月	■現実的な支援計画を立てるために、まずは社会資源の洗い出しを行った	—	—
<b>(イ)準備段階</b>				
地域の現状把握	11月	■地域の実情をよく知る第2層生活支援コーディネーターや、行政計画を担当した市担当者(福祉政策課)の知見をもとに現状把握を実施	—	—
連携PFの企画・設計	11月	■共通の地域特性をもつ地域単位でのPFの立ち上げを検討	9月～	■地域特性が明確でない地域には、参加者を運営側が指定しない自由参加型でのPFの形も検討
取組テーマの設定	11月	■初年度はニュータウンエリアで取組むため、つながりづくりをテーマとした	9月～	■PFを別地域に展開するため、該当地域が共通して抱える課題や孤独・孤立の指標のアセスメントをもとにテーマを設定
	11月	■「孤独・孤立の定義」がPFや孤独・孤立対策の基盤ともなるため、丁寧に定義を検討した	—	—
関係団体のリストアップ(市内)	11月	■市内連携にあたっては、市内連携会議前後にフォローを行いつつ、他部署の自主性を尊重した	—	—
関係団体のリストアップ(市外)	11月	■理想のPFのあり方や避けたい状況を共有したうえで、第2層生活支援コーディネーターに一任した	—	—
初期メンバーへの声掛け	11月	■メンバーの納得を得られやすいよう、活動団体には第2層生活支援コーディネーターから、企業等には市地域共生推進課から声掛けを実施	—	—
関係団体のリストアップ(市内)	1月	■市内連携会議を開催し、講師を招いて孤独・孤立対策についての講話を行うことで、これから孤独・孤立対策に取り組むことを市内で共有した	—	—

(ウ) 設立段階				
連携PFの運営	12月	■初年度は主に市地域共生推進課が企画を行い、第2層生活支援コーディネーターと共同で運営を行った	4月～	■市地域共生推進課と第2層生活支援コーディネーターが共同で企画・運営を行う
域内住民・団体への情報発信	—	—	9月～	■生活動線上で相談窓口に関するリーフレットを配布
			12月	■つながりづくりを推進するイベントの開催
			1月～	■PFでの話し合いを踏まえて、「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」を作製し、スーパーや飲食店で配布
			2月	■孤独・孤立とつながりについて考えるシンポジウムの開催
(エ) 自走段階				
地域協議会の設置	—	■社会福祉法に基づく支援会議の活用	—	—
PFの拡大・活性化	—	—	今後	■高齢分野の日常生活圏域ごとではなく、日々の生活様式に基づいて地域を拡大していく
			今後	■アセスメントシートをもとに、共通の地域特性を持つ地域単位でPFを水平展開していく

【それぞれの段階での留意点】

(ア)初期段階		
①	主担当部署の設定	<p>■幅広い領域に関わるテーマであるため、重層的支援体制整備事業や地域包括ケア等に取り組んできた「健康福祉部地域共生推進課」が担当</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 孤独・孤立は幅広い領域に関わる内容であることから、福祉相談支援や重層的支援・地域包括ケア等の分野横断的な取組を進めてきた「健康福祉部地域共生推進課」が担当を務める。</li> </ul>
②	担当者の初動	<p>■現実的な支援計画を立てるために、まずは社会資源の洗い出しを行った</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「何をするか」からではなく、「何が社会資源としてあるのか」「なにが活用できるのか」から考えることで、地に足がついた計画を立てることができ、それにより他部署や社会福祉協議会からの理解や協力が得られやすくなった。</li> <li>・ 市地域共生推進課職員と社会福祉協議会の第2層生活支援コーディネーターとで知見を出し合い、孤独・孤立対策に資する社会資源を洗い出した。その後、洗い出した社会資源から導かれる現実的なプロセスや目指す姿を描いた。</li> </ul>

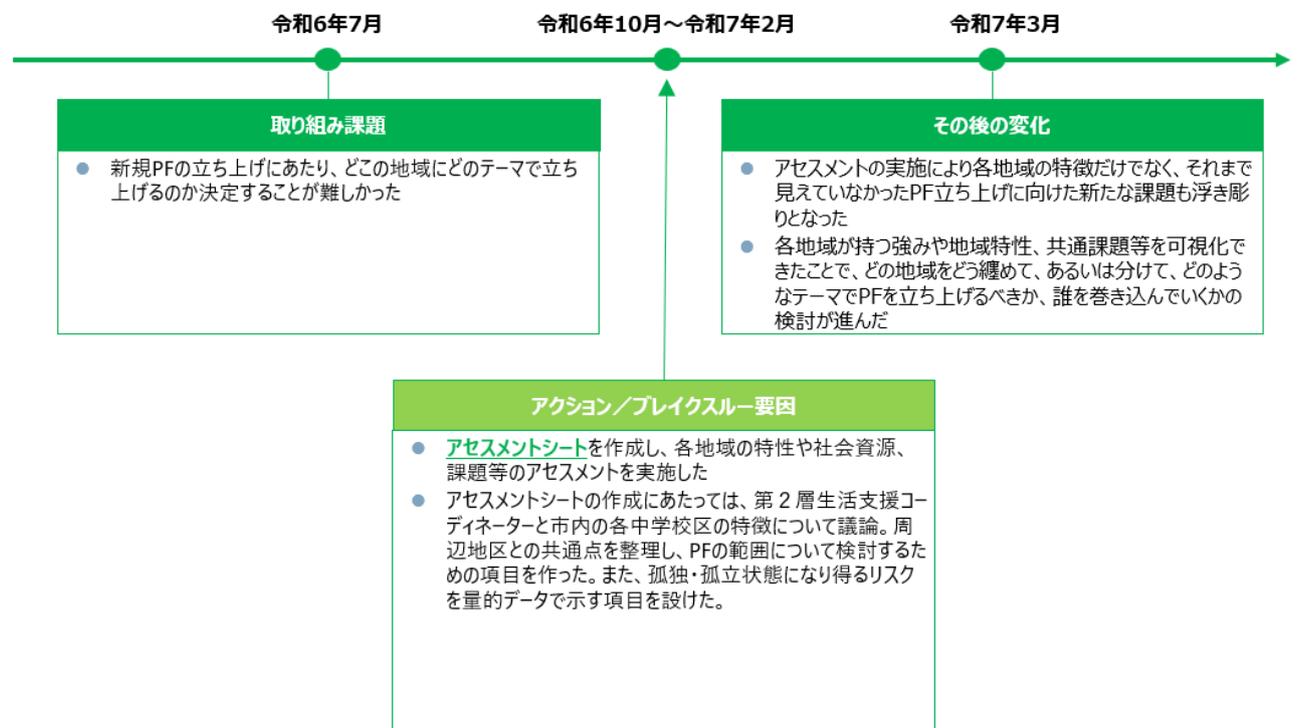
(イ)準備段階		
③	地域の現状把握	<p>■地域の実情をよく知る第2層生活支援コーディネーターや、行政計画を担当した市担当者(福祉政策課)の知見をもとに現状を把握</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日々各地域に密着して支援を行っている第2層生活支援コーディネーターの知見を活かし、主に高齢者分野の現状把握を実施した。</li> <li>・ 行政計画には各地域の特徴が記載されているため、計画策定を担当した市職員の協力を得て、各地の特性を把握した。また、地域を区分けした際の担当者も各地の特性を把握しているため、知見を活用した。</li> </ul>
④ -1	取組テーマ決定	<p>■初年度はニュータウンエリアで取組むため、つながりづくりをテーマとした</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ニュータウンエリアは土地に根付いた文化や住民の地縁が少ないことや、既に居場所づくりに取組む活動団体が豊富にあったことから、「つながりづくり」をテーマに据えた。</li> </ul> <p>■PFを別地域に展開するため、該当地域が共通して抱える課題や孤独・孤立の指標のアセスメントをもとにテーマを設定</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 孤独な子育て世帯が多い、就学援助利用者が多い等、その地域が共通して抱える課題をテーマとして設定することとし、各地域の課題を可視化するにあたっては、アセスメントシートを活用した。</li> </ul> <p>■「孤独・孤立」の定義がPFや孤独・孤立対策の基礎となるため、丁寧に定義づけを行った</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 春日井市の孤独・孤立対策を進めるうえで、PF参加者が主体的に参画できるよう、誰もが我が事として捉えられ、かつ自分にもできることがあると感じてもらえるよう「自分のことが話せる相手がない状態」と定義した。</li> <li>・ 定義づけにあたっては、仮説を立てたうえで対応策を検討し、行き詰まったら再度仮説を立て直す、というプロセスを繰り返し、丁寧に検討を行った。</li> </ul>

④ -2	連携PFの 企画・設計	<p>■<u>共通の地域特性をもつ地域単位でのPFの立ち上げを検討</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>農地が多いエリアや新興住宅地、高齢化が進んでいる地域や子育て世帯が多い地域等、地域によって課題や特徴が異なり、強みである地域資源も異なる。そのため、各地の実態やニーズに即したPFを展開できるよう、市で1つのPFではなく、共通の地域特性をもつ単位でPFを複数立ち上げ、最終的に市全域をカバーできる体制を構築する。</li> </ul> <p>■<u>地域特性が明確でない地域には、参加者を運営側が指定しない自由参加型でのPFの形も検討</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>各地域の現状把握により、PFを立ち上げやすい土壌がある地域と、立ち上げにくい地域、地域特性が曖昧で立ち上げイメージが湧きにくい地域の3種類に分けられた。</li> <li>昨年度は、地域で共有されている課題や社会資源、行政との連携経験があり、PFを立ち上げやすい土壌がある地域でPFを立ち上げた。</li> <li>立ち上げに課題がある地域については、その課題が明確であるため、解決方法を検討することができる。一方、立ち上げイメージが湧きにくい地域については、社会資源や活動団体が不明瞭でメンバーへの声掛けが難しいため、行政から関係団体へ参加を呼びかける形式のPFではなく、自由参加形式のPFの方が適性があると考えられる。</li> </ul>
⑤	関係団体の リストアップ 初期メンバー への声掛け	<p>■<u>市内連携にあたっては、市内連携会議前後にフォローを行いつつ、他部署の自主性を尊重した</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>市内連携会議前に、会議の目的と、孤独・孤立と各課業務との関連性を説明することで、市内関係課が主体的に会議に参加・発言してもらえるよう回しをした。</li> <li>市内連携会議後には今後の方針や実際の行動レベルまで認識を共有することで、確実に連携出来る体制を整えた。</li> </ul> <p>■<u>市内連携会議を開催し、講師を招いて孤独・孤立対策についての講話を行うことで、これから孤独・孤立対策に取り組むことを市内で共有した</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自殺予防対策ネットワーク会議に参加している部署と、孤独・孤立になり得る出来事と関連のある行政手続きを所管する部署に対して、孤独・孤立対策の必要性や市の取組の方向性等を周知した。</li> </ul> <p>■<u>理想のPFのあり方や避けたい状況を共有したうえで、第2層生活支援コーディネーターに一任した</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の様々な活動者と接点を有している第2層生活支援コーディネーターに一任した。依頼するにあたっては、従来の高齢者PFと差別化することや、PFのテーマである「つながりづくり」と自らの地域活動に親和性を感じるメンバーとしたいことを伝えた。</li> </ul> <p>■<u>メンバーの納得を得られやすいよう、活動団体には第2層生活支援コーディネーターから、企業等には市地域共生推進課から声掛けを実施した</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域食堂等の活動団体には普段からコミュニケーションをとっている生活支援コーディネーターから声掛けを実施し、スムーズに話ができるようにした。施設や企業等には公的機関としての安心感がある市地域共生推進課から声掛けを行った。</li> </ul>

(ウ) 設立段階	
⑥	<p>域内住民・団体への情報発信</p> <p> <b>■生活動線上で相談窓口に関するリーフレットを配布</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>相談窓口を掲載したリーフレットを、病院や理美容院、スーパー等の生活動線上で配布することで、公的機関に訪問しない市民に対しても日常の中で相談窓口を知ってもらうようにした。</li> </ul> <b>■つながりづくりを推進するイベントの開催</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>地域食堂による弁当販売や福祉事業所の作品販売等を行い、市民の居場所や交流活動について近隣住民に広く周知を行った。</li> <li>子どもからお年寄りまで約 1,000 人の市民に来場してもらい、来場者同士や出展者同士、さらには来場者と出展者が出会い、ゆるくつながり交流できる場とした。</li> </ul> <b>■PFでの話し合いを踏まえて、地域居場所を示すマップである「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」を作製し、スーパーや飲食店で配布</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>昨年度PFの活動の中で生まれた「ぷらっとノート」をはじめとした、つながりづくりの活動紹介を掲載するマップを作製した。「ぷらっとノート」について周知するだけでなく、設置している活動団体の紹介文や顔写真を掲載して、各団体に親近感をもってもらうよう工夫することで、各活動に関心をもってもらい、気軽に訪問できるようにした。</li> </ul> <b>■孤独・孤立とつながりについて考えるシンポジウムの開催</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立は誰にも起こりうる身近な問題であり、それを予防するために、つながりづくり活動が全国や市内で行われていることを周知するために、「身近でゆる～いつながり」をテーマにした有識者による基調講演や、市内で居場所やつながりづくり活動を行う支援者によるパネルディスカッションを行った。</li> </ul> </p>
⑦	<p>連携PFの運営</p> <p> <b>■初年度は主に市地域共生推進課が企画を行い、第2層生活支援コーディネーターと共同で運営を行った</b>  <b>■市地域共生推進課と第2層生活支援コーディネーターが共同で企画・運営を行う</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>初年度(令和5年度)は、企画は市地域共生推進課、運営は市地域共生推進課と第2層生活支援コーディネーターが共同で行ったが、2年目(令和6年度)は、企画段階から市地域共生推進課と第2層生活支援コーディネーターが共同で実施し、運営は第2層生活支援コーディネーターを中心として市地域共生推進課も共同で実施する。</li> </ul> </p>

(エ) 自走段階	
⑧	<p>地域協議会の設置</p> <p> <b>■社会福祉法に基づく支援会議の活用</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>重層的支援体制整備事業の実施に伴い設置した、社会福祉法第106条の6に基づく支援会議の枠組みを活用し、地域協議会を兼ねる。</li> </ul> </p>
⑨	<p>PFの活性化</p> <p> <b>■高齢分野の日常生活圏域ごとではなく、日々の生活様式に基づいて地域を拡大していく</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>移動範囲や普段使用する施設、生活様式が同じで、よって抱える地域課題も類似していると想定される周辺地域へPFを拡大した。</li> </ul> <b>■アセスメントシートをもとに、共通の地域特性を持つ地域単位でPFを水平展開していく</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメントシートにより各地域の強みや特徴、地域課題を可視化することで、どの地域をどう纏めて、あるいは分けて、どのようなテーマで、誰を巻き込んでPFを立ち上げるか等の検討を行い、PFを市内に水平展開していく。</li> </ul> </p>

ブレイクスルー要因	
アクション/ ブレイクスルー要因	<p><b>アセスメントシートにより、各地域の特徴や課題を可視化</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>新規地区でのPF立ち上げにあたり、地区・テーマの選定に難航していた。そのため、第2層生活支援コーディネーターと市内の各中学校区の特徴について議論し、アセスメントシートを作成した。アセスメントシートでは、各地域の地域属性(古くからある住宅地、ニュータウン等)や社会資源の有無(集合可能施設の有無等)、孤独・孤立リスクの高低(高齢化率、就学支援世帯率、生活保護率等)を洗い出した。また、周辺地区との共通点を整理し、PFの範囲について検討するための項目を作った。</li> </ul> <p>アセスメントシートを記入した結果、まちづくりや孤独・孤立対策に地域差が大きいこと等、これまで見えていなかった課題が明らかになった。課題が明確となったため、次年度以降は課題への対応策をとりつつ新規地区にてPFを立ち上げる予定である。</p>



## コラム ～地域の支援団体から見た孤独・孤立対策と連携PFの重要性～

### えがおの駄菓子屋(愛知県春日井市)

- ・ 代表の毛利さまは、介護業界での経験をきっかけに日本の人口減少や少子高齢化による社会の衰退に危機感を抱き、子ども達に明るい未来を残すためできることに取組もうと決意。「社会全体を変えることはできないが、住みやすい地域をつくることならできる」と思い、地域住民がつながりあい、支えあう居場所をつくろうと、令和5年に「えがおの駄菓子屋」をオープンした。
- ・ 「みんなのもう1つの家になる」という理念のもと、子どもやその母親、高齢者が安心して過ごせる居場所となるように様々な活動に取組んでおり、年間の利用者数は延べ約 16,000 人にのぼる。

#### 📍「えがおの駄菓子屋」の活動内容

- ・ 週6で駄菓子屋を開いている。1階は駄菓子屋と飲食スペース、2階はオープンスペースとして開放しており、子ども達が駄菓子を買って食べるだけでなく、学校の宿題をしたりゲームをしたりと思い思いに過ごしている。運営は高齢者を中心としたボランティアが行っており、子どもにとって多世代と関わる場となっているほか、高齢者の居場所にもなっている。また、信頼できる居場所があることで母親の安心感にもつながっている。
- ・ また、高齢者向けに麻雀教室や映画上映会等の各種講座やイベントを実施し、家の外に出る機会を創出しているほか、日常の相談や困りごとを受け付けている。

#### 📍「楽しい」が孤独・孤立対策につながる

- ・ 引きこもりや家からなかなか出ない高齢者等も、楽しみがあればその場に来てくれることが多い。そのため、住民が「楽しい」と感じてもらえる企画作りを行っている。
- ・ 夏と秋には、店前の広場でお祭りを開催している。令和6年度は、夏のお祭りは延べ約 2,000 人、秋のお祭りは延べ約 1,000 人の来場があった。
- ・ 高齢者向けの講座やイベントも、家から出ない傾向がある高齢者男性をはじめ、それまで顔を見なかった高齢者が顔を出してくれるようになった。

#### 📍支援者同士がつながることが重要である

- ・ 一つの団体でできることには限りがあるため、いかに他団体と連携して支援の幅を広げていくかが重要である。また、孤独・孤立対策を行う支援者自身が孤独・孤立してしまうケースも見られるため、それを防ぐためにも、支援者同士のつながりは必要である。
- ・ 互いの活動について話す機会はあまり多くないため、PFにて互いの活動を知ったり、ノウハウを共有したりできることは大変意義がある。とはいえ、すべての支援者の温度感が一致するとは限らないため、PFは支援者同士がゆるくつながり、ネットワークづくりのきっかけとなる場と位置付けることが良いのではないかと。



あたたかく楽しい社会にするために、誰でも受け入れられる居場所をつくることで、多世代の住民が交流し、支えあう地域づくりを行う。

えがおの駄菓子屋 代表理事 毛利 規寛さま



## 5.自治体等との打合せ記録一覧

No.	日時	打合せ相手団体	出席者	
			打合せ相手	NRI
1	7/29(月) 15:00-16:30	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	長坂様、上野様、伊藤様、 稲垣様、町本様	生駒、橘、小田
2	9/4(水) 16:40-17:00	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	長坂様、上野様、伊藤様、 稲垣様	生駒、橘、小田
3	10/7(月) 10:00-11:00	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	上野様、伊藤様、稲垣様	生駒、橘、小田
4	12/16(月) 10:00-12:00	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	長坂様、上野様、伊藤様、 稲垣様、町本様	橘、小田
5	1/7(火) 16:00-17:00	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	上野様、伊藤様	橘、小田
		株式会社 Ridilover	柴田様	
		一般社団法人 Shien	山田様	
6	1/23(木) 11:00-12:00	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	上野様、伊藤様、 稲垣様、町本様	橘、小田
7	2/26(水) 10:30-11:00	春日井市 健康福祉部 地域共生推進課	上野様、伊藤様、 稲垣様	橘、小田

## 自治体による従前からの取組

### ■ 高齢者向けPF

(取組概要)

高齢者を対象に平成30年に立ち上げられた、①地域ケア個別会議②地域ケア会議③地域協議会の3つの会議体からなるPFである。立ち上げ当初は一部のモデル地域のみであったが、水平展開が進み、現在では春日井市全域に展開されている。①地域ケア個別会議は、困りごとに関する個別ケースを議論する会議体である。②地域ケア会議は、地域課題に対して住民自らができる解決手法を考えて実行する会議体であり、高齢で庭木の手入れが難しい世帯へ定期的に手伝いに行く活動や、地域で気軽に外出するきっかけづくりとして公園でのラジオ体操会を定期的に開催する等の活動が創出されている。③地域協議会では、近隣地域の解決方法を知るための会議体であり、各地域で年2回開催されている。

### ■ 藤山台・岩成台地区孤独・孤立対策官民連携PF

(取組概要)

孤独・孤立対策官民連携PFも上記高齢者向けPFと同様に、まずはモデル地域にて立ち上げ、その後市全域へ展開することとした。令和5年度は、1つ目のモデル地域として、地域課題と、それを解決しうるソフト・ハード両面の資源が豊富である藤山台・岩成台を選定し、PFを立ち上げた。立ち上げに当たっては、上記高齢者向けPFのうち②地域ケア会議の立ち上げノウハウと、③地域協議会の場を活用した。モデル地域にて居場所づくり活動やつながりづくり活動を行う団体に参加してもらい、孤独・孤立について理解をしたり、そのためにどのような対策ができるのかをグループに分かれてディスカッションしたりした。その結果、気軽に気持ちを書き込み、それに対してほかの人が返信をすることでゆるく人と人がつながることができる「ぷらっとノート」の取組が生まれた。

図表 ぷらっとノート



試行的事業	
① PF拡大を目指した地域アセスメントの実施	
概要	昨年度立ち上げた藤山台・岩成台地区のPFを、今後は市内全域へ水平展開していく。水平展開の計画策定や地域・テーマ選定にあたって、地域のアセスメントシートを作成して、各地域のアセスメントを実施した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメントシートを作成することにより、各地域の特徴や孤独・孤立リスク、テーマ、最適なPF立ち上げ方針を整理し、効果的なPF展開の戦略を立てること。</li> <li>担当者が異動で変更となった場合でも、PF立ち上げ経緯が分かり、かつ各地の現状を更新できるようにすること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>アセスメントシート作成にあたって、本事業主担当の地域共生推進課と、地域密着型で地域支援を実施している第2層生活支援コーディネーターとで各地域の特徴や、新規PFの展開先について議論を行った。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>第2層生活支援コーディネーターとの議論やアセスメントシートの作成により、各地域の特性や社会資源、さらにはPF立ち上げにあたっての課題を可視化した。</li> <li>各地域が持つ強みや地域特性、共通課題等を可視化することができたため、どの地域をどう纏めて、あるいは分けて、どのようなテーマでPFを立ち上げるべきか検討が進んだほか、他部門と調整・検討する際のツールにもなった。</li> </ul>

アセスメントシートは主に下記の観点を整理できるものとした。

- 代表的な地域属性: その地域の特徴を端的に示す
- 集合可能施設: PFの拠点となり得る施設の確認
- 孤独・孤立リスク: 地域特性を定量的・定性的に確認
- 行政の介入の必要性・緊急度: 行政が介入するニーズ・緊急度を確認
- 周辺地区との共通点: 周辺地域と一緒にPFを立ち上げることができるか確認
- PF立ち上げに向けたファーストアクション: 地域住民の活動状況に応じたアプローチ方法を確認
- 地域課題: PFのテーマとなる地域課題の確認

図表 アセスメントシート(抜粋)

**A. 地区属性**

**I. 代表的な地区属性**  
代表的な地域が複数ある場合は複数チェック。

古くからある住宅地  
 新興住宅地  
 ニュータウン  
 農地が多い  
 工場が多い

**B. 集合可能施設**

**I. 集合可能施設名**  
集合可能施設が存在する場合は、その施設名を記入してください。

(ex) ぐるっぽふじとう

※集合可能施設がない場合は、Bは未記入の上でF(4)を記入。

**H. アセスメント項目⑤**

**I. ファーストアクションの検討**

中心人物や、自治組織、活動者など

存在する  
存在しない

存在する  
存在しない

個別にコンタクトをとり、意思の働き込み方法を模索する

連携体制  
あり  
ない

連携にコンタクトをとり、働き込みで進める

対応  
あり  
ない

【注意】個別にコンタクトをとり、働き込みで進める

**C. アセスメント項目①**

**I. 孤独・孤立リスクの検討(統計)**  
各項目の数値を記入してください。

■ 高齢化率	20.0%
■ 単身世帯割合	17.5%
■ 子育て世帯割合	22.0%
■ 転出入者割合	13.0%
■ 就学援助利用割合	6.5%
■ 生活保護被保護者割合	1.5%

高齢者の単身世帯が多い場合、孤独・孤立のリスクが高い可能性がある。

転出入が多く子育て世帯が多い場合は、一人で子育てをする人が多い可能性がある。

利用状況は、生活保護受給者が多い場合、生活支援策の導入が必要がある。

## ② 生活動線上でのリーフレット配布

概要	昨年度公的な場所で配布を行った相談窓口リーフレットを、医療機関や薬局、理美容室、金融機関、スーパー等の住民の生活動線上で配布した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常的に訪れる場所でリーフレット配布を行うことで、公的機関や福祉施設を訪問しない市民にも孤独・孤立問題やその相談窓口の周知をできるようにした。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>各団体へ趣旨等の説明を行い、理解を得たうえで配布をした。</li> <li>困っている人に手渡しを実施してもらう等、必要としている人に届きやすくした。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>全607箇所、全21,262枚設置した。</li> <li>配布先では、客との雑談中にぼろっと困りごとが零れた際に手渡すことができた、との声があった。</li> <li>クリニックの待ち時間で手に取りやすく、特に精神科クリニックでリーフレットの配布数も多いという声があった。</li> </ul>

図表 配布したリーフレット

### 気軽に申し出たり お話しできる場所を 見つけてみませんか？

このリーフレットは、SNSや電話など、自分のことを話せる相談先や、趣味や地域の集まりなどあなたの居場所を見つけるためのお手伝いをします。

ご自身のため、大切な人のために  
ご活用ください。

**趣味のサークルや  
ボランティア活動などに関心がある方は  
こちらへ気軽にお問合せください**

連絡先：0568-85-4321  
(総合福祉センター内)  
(FAX: 0568-86-3156)  
受付日時：平日 8:30～17:15  
相談窓口：春日井市社会福祉協議会 地域支援課



### 直接は話づらい…、 SNSで相談してみませんか

●あなたのいばしょ  
内容：年齢や性別を問わず誰でも無料・匿名で利用できるチャット相談窓口です。  
受付日時：24時間 365日

●あいちこころのサポート相談  
内容：愛知県に在住、在勤、在学の方を対象とした、SNSを活用したこころの悩み相談です。  
受付日時：月～土曜日 20:00～24:00  
日曜日 20:00～翌日 8:00

●10代20代女性のためのLINE相談  
内容：親に言えない悩みがある、対人関係で悩んでいる、居場所がない、なぜか分からないけど涙がでる…、どんなことでも大丈夫です。ひとりで悩まず相談してみませんか。  
受付日時：月・水・木・金・土曜日 10:00～22:00

●生きづらびっと  
内容：「死にたい」「消えたい」といったつらい気持ちを安心して話していただくことのできるSNS相談です。  
受付日時：毎日 8:00～22:30

春日井市健康福祉部地域共生推進課  
電話 0568-85-6251  
FAX 0568-84-5764  
chiki@city.kasugai.lg.jp

### おせっかいかも しれませんが・・・

今、心配はないけど…  
楽しく過ごしたいな…

あなたに知ってほしい  
相談窓口があります



春日井市  
kasugai City  
令和6年9月発行

### こんな時、相談してみませんか

#### 自分の気持ちを整理できない

相談名：メンタルヘルス相談  
連絡先：0568-85-6172(予約制)  
(FAX: 0568-84-5764)  
受付日時：相談実施日は市ホームページをご確認ください。

### いじめや 学校に行けなくて悩んでいる

連絡先：0568-34-8400(中央公民館)  
受付日時：平日 9:00～12:00、13:00～16:00  
相談窓口：いじめ・不登校相談室

### 女性が家庭や 職場の人間関係に悩んでいる

相談名：女性の悩み相談  
連絡先：0568-85-7871(レディヤンかすがい)  
受付日時：火～金曜日 13:00～16:30  
※祝休日、及び年末年始を除く

### 体調で気になることがある

相談名：健康相談  
連絡先：0568-85-6164(健康増進課)  
kenko@city.kasugai.lg.jp  
受付日時：平日 8:30～17:15

### 障がいのことで どこに聞くとよいか分からない

連絡先：0568-84-5300(総合福祉センター内)  
(FAX: 0568-84-4913)  
受付日時：平日 8:30～17:00  
相談窓口：薬師相談支援センターしゃきょう

### 外国語で相談したい

相談名：外国人相談  
(市役所2階市民相談コーナー)  
連絡先：0568-85-6624  
(※相談日時のみ使用可)  
相談日時：第1水曜日……英語・フィリピン語  
第2・4水曜日……ポルトガル語  
第3水曜日……スペイン語  
9:00～12:00、13:00～16:00

### 子育てのことで どこに聞くとよいか分からない

連絡先：0568-85-6170(市役所2階)  
0568-87-1552  
(総合保健医療センター3階)  
kodomo@city.kasugai.lg.jp  
受付日時：平日 8:30～17:15  
相談窓口：こども家庭支援課(こども家庭センター)

### お金が足りなくて生活が苦しい

連絡先：0568-85-6152(市役所2階)  
受付日時：平日 8:30～17:15  
相談窓口：自立支援相談コーナー  
相談フォームからの相談も可能です。

### 高齢者のことで どこに聞くとよいか分からない

相談窓口：地域包括支援センター  
※市内に12か所の地域包括支援センターがあります。  
市ホームページから担当の相談窓口をご確認ください。  
相談フォームからの相談も可能です。

### 家庭や学校、職場になじめない

相談名：子ども・若者総合相談  
連絡先：0568-82-7830(子育て推進課)  
s-soudan@city.kasugai.lg.jp  
受付日時：月～土曜日 15:00～19:00

市HP  市公式LINE 

図表 リーフレット配布場所の詳細

設置場所	設置場所数	設置部数
春日井市医師会の会員医院	181	7,200
春日井市薬剤師会の会員薬局	144	5,430
春日井市歯科医師会の会員歯科医院	113	5,650
美容組合の会員美容室	90	552
理容組合の会員理容室	76	2,280
株式会社バローホールディングス(スーパー)	3	150



今回のイベントは、春日井市の孤独・孤立問題やそれに対するPFの取組について市民に周知したいという思いと、PF参加団体の一つである「ちいき食堂厨」のイベントを開催して活動を周知したいというニーズが合致したことにより企画された。民間の活動団体よりも市地域共生推進課の方が早く施設の予約をできることや、活動団体の自由で豊かな発想を活かすことを考慮し、安全面や会場準備等の環境整備は市地域共生推進課が行い、イベント内容は主催団体のちいき食堂厨が企画し、それぞれの得意を活かした連携を行った。スタンプラリーにより来場者が各ブースを回るようにしたり、会場のスタッフに声をかけるとお菓子をもらえることで交流を生み出す企画を行ったり等、主催団体のアイデアにより人々がゆるやかにつながることができる機会が生まれた。広報は、主催団体の日頃のコネクションを活用し、ポスト投函だけでなく、小学校や幼稚園、保育園への配布も行った。市地域共生推進課が共催であることから施設を早めに予約でき、広報に時間をかけることができ、また公的機関が入っていることの安心感から学校での広報も実施できた。

つながりづくり活動や地域の居場所を近隣住民に知ってもらうために、各団体がブースを出展し、お弁当の販売やワークショップ、作品販売等を行った。本イベントが開催されたのは廃校された小学校を建て替えた施設であり、近隣住民のアクセスが良い立地であったことや、フードパントリー配布等を行ったことで、多くの住民に来場いただいた。また、地元小中学生によるブラスバンドやオカリナクラブの演奏等のステージイベントや、子ども向けのゲームコーナーの設置等により、子どもからお年寄りまで幅広い世代が集まった。近隣小学校のブラスバンドのステージは、子どもだけでなくその親世代の呼び込みにもつながった。

図表 ステージイベントに集まる来場者



図表 ゲームコーナーで遊ぶ子ども



藤山台・岩成台PFの取組として生まれた「ぷらっとノート」を紹介する展示を行った。来場者にもぷらっとノートを書いてもらい、ぷらっとノートで人とゆるくつながることを体験できるブースも設置した。また、当日は新聞の取材も入り、12月20日(金)中日新聞の朝刊に記事が掲載された。

図表 ぶらっとノートを記入する親子



図表 ほっこりまつりを紹介した新聞記事



出所)中日新聞 令和6年12月20日朝刊

12版 第29474号

「孤立、孤独を防ごう ほっこりまつりで交流」

(効果検証)

来場者アンケートには268グループが回答した。回答者の年齢は、40～50代が最も多く、35.8%、ついで、60代以上が29.1%、小学生22.4%、20～30代20.1%となっており、子どもからお年寄りまで幅広い世代の方に来場いただいた。また、何人で来場したかについては、2人が最も多く、35.9%、ついで、1名が22.1%、4名17.6%、3名17.2%と、夫婦や家族連れ、友人と等、複数名で連れだって来場した方が多い。今回のイベントで興味を持った団体を問う設問では、最も多かった団体で34.3%でありかつ、全団体に票が入ったことから、今回のイベントがつながりづくり活動に取り組む団体の周知につながったことが分かる。また、今回のイベントで楽しかったこととして「色んな方々との交流」「いろんな団体の支援とつながる」「老若男女が接する」「孫と遊ぶこと」「たくさんの人と話せた」等、人とのつながりを楽しんだという意見が多く上がった。

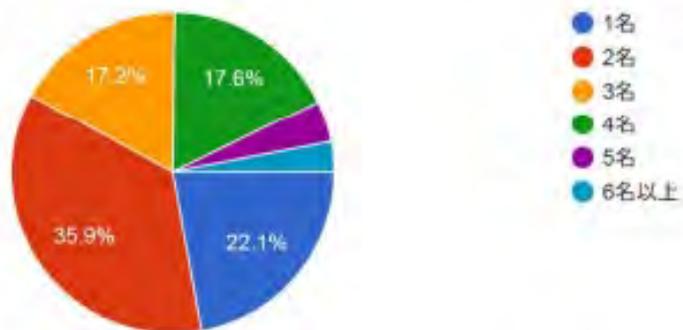
図表 来場者の年齢

年齢を教えてください。(人数分該当する全てに○をつけてください)  
268 件の回答



図表 一緒に来場者した人数

グループで来場された方は、人数を教えてください。  
262 件の回答



出展した活動団体からは、当日販売する作品作りをすることで当事者の意欲を向上できたり、実際に売れたことによって社会とつながる喜びを感じることができたという声があがった。

④「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」の作製	
概要	昨年度、藤山台・岩成台PFにて生まれた「ぷらっとノート」をはじめとした、つながりづくりの活動紹介を掲載するマップを作製した。紙媒体の配布だけでなく、春日井市 HP やPF参加団体の SNS などのデジタル媒体でも周知した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 人々がゆるくつながりあえる「ぷらっとノート」の取組を広く知ってもらうこと。また、「ぷらっとノート」の取組への参加団体を増やすこと。</li> <li>• ノートを設置している団体は、つながりづくりや居場所づくりの活動を行っているため、その活動内容に関心を持ってもらい、気軽に訪問できるようにすること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 掲載団体運営者の顔写真とメッセージを載せることで、読む人が居場所に対して親近感やあたたかさを感じられるようにした。</li> <li>• 身近なところでマップが手に入るよう、ノートを設置している団体の活動拠点だけでなく、飲食店やスーパー等の生活動線上に配置した。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 公的機関だけでなく、スーパーやスポーツクラブ、飲食店等にて、約5,700枚のマップを設置予定で調整を進めており、現時点で約2,000枚を設置した。</li> <li>• マップを活用してPFへの新規参加団体を募る過程で、ノートの設置場所が新たに9箇所増えた。</li> <li>• 市民から、とても見やすい、マップを活用して困っている方に積極的に居場所を教えたい、初めてマップを見た市民からどのようなマップか複数質問があり関心を持ってもらえた、ニュータウンエリア以外の地域でも、このようなマップがあったらいい等の声があがった。</li> </ul>

図表 作製した「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」



図表 「ゆるやかなつながりづくり応援マップ」配布場所(予定)

設置場所	設置箇所数	設置枚数
スーパー	3	700
認知症カフェ	12	600
飲食店	2	100
スポーツクラブ	1	100
無料塾	1	50
PF参加団体	21	1,650
民生委員・児童委員	—	640
社会福祉協議会	7	210
地域福祉コーディネーター	—	300
地域包括支援センター	2	100
イベント・研修等	—	370
公的機関・施設	6	892

⑤ シンポジウムの開催	
概要	「身近でゆる～いつながり」をテーマに、有識者による基調講演や、市内で居場所やつながりづくり活動を行う活動団体によるパネルディスカッションを行った。また、「ぷらっとノート」の展示も行い、孤独・孤立には予防が大切であることの啓発やつながりづくり活動の周知を行った。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>孤独・孤立問題が如何に身近な問題であるか、人と人、人と地域のつながりが大切であることを広く市民に周知すること。</li> <li>春日井市内のつながりづくり活動を知ってもらい、関心をもってもらうこと。</li> <li>つながりづくり活動の一つとして実践されている「ぷらっとノート」の取組について周知すること。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>基調講演でつながりづくりや安心できる居場所の重要性を周知し、その後春日井市のつながりづくり活動や活動団体の思いを伝えることで、これらの活動を参加者がより身近なものとして捉えられるようにした。</li> <li>公共施設でのチラシ配布だけでなく、PFメンバーの活動場所でのポスター掲示や公式 LINE 等での広報等も行った。</li> <li>イベント参加者はシンポジウムへの参加も見込めると推測し、お祭りや講演会、高齢福祉関連のイベントやウォーキングイベント等、様々なイベントで案内チラシの配布を行った。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>159人が来場した。</li> <li>アンケートの結果、93%が「身近な地域のつながりは大切だと感じた」、42%が「つながりづくり活動に参加してみたいと思った」と回答した。</li> <li>今回のシンポジウムが、つながりづくり活動の周知だけでなく、実際に支援活動をするきっかけや活動団体間の連携につながった。</li> </ul>

(実施概要)

日時:2月16日(日) (13:00~16:00)

場所:春日井市東部市民センターホール

内容:

- ・孤独・孤立問題や人と人、人と地域がゆるやかにつながりあう活動の魅力に関する基調講演
- ・孤独・孤立問題とつながりづくりの大切さ、市内のつながりづくり活動の周知を目指したパネルディスカッション
- ・「ぷらっとノート」に関するパネル展示

基調講演講師:まほうの다가しやチロル堂 共同代表 吉田田タカシさん

パネルディスカッション登壇者:同朋大学社会福祉学部専任講師 加藤昭宏さん、ちいき食堂厨 木全奈穂さん、ちいき食堂厨 吉田和江さん、NPO 法人たんぼぼの風 松本祐子さん、えがおの駄菓子屋 毛利規寛さん、春日井市社会福祉協議会地域支援課 野寄雅人さん

基調講演では、作ることを通じて子どもが自分たちで考えた答えにたどり着く練習をする「アトリエ e.f.t.」や、地域で子育てを行い、大人も気軽に助け合えるシステム「まほうの다가しやチロル堂」、楽しみながら教育についての意識をアップデートする「トーキョーコーヒー」等の取組を行う吉田田タカシさんが登壇した。各取組について紹介していただき、人と人が楽しんでつながることの大切さや、対話やつながりにより教育や社会への意識を変化させていくこと、安心と自信、主体性を育む教育が子どもたちの生きる力を育てること、社会や地域のための小さな活動がひいては自分自身の精神的豊かさにもつながること等を訴求した。

パネルディスカッションでは、春日井市でつながりづくり活動を行う方々にご登壇いただき、各団体の活動内容と取組に向けた熱い思いをご紹介いただいた。つながりづくり活動は遠い存在ではなく、身近なところにも懸命

に活動されている方々が居ることを知る機会となった。会場からも、各活動に感銘を受けたという感想が多数寄せられた他、それぞれの活動内容についての質問もあがり、参加者も強く関心を持ったことがうかがえた。

図表 吉田さんご講演の様子



図表 パネルディスカッションの様子



ロビーでは、藤山台・岩成台PFの取組として生まれた「ぷらっとノート」を紹介する展示を行った。多くの来場者が足を止めて展示を見ており、ぷらっとノートをはじめ、春日井市が孤独・孤立対策に取り組んでいることを周知した。

図表 ぷらっとノートの展示を見る参加者



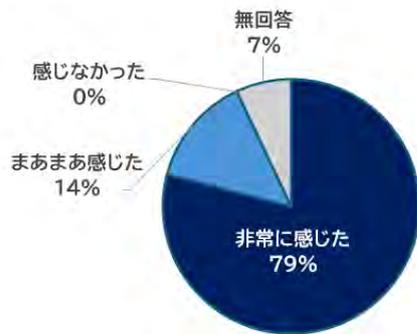
#### (効果検証)

来場者アンケートには43人が回答した。回答者の年齢は、70歳以上が最も多く半数を超えた。30～60代は44%となり、今後のつながりづくり活動の担い手となり得る市民も多く来場いただいた。今回のイベントの満足度としては、基調講演は98%が、パネルディスカッションは89%が「とても良かった」「良かった」と回答した。また、93%が地域とのつながりの大切さを感じたと回答した他、42%が新たにつながりづくり活動に参加してみたいと思ったと回答した(51%は既に参加中)。

図表 地域のつながりの大切さへの理解度

問5. 身近な地域のつながりは大切であると  
感じたか

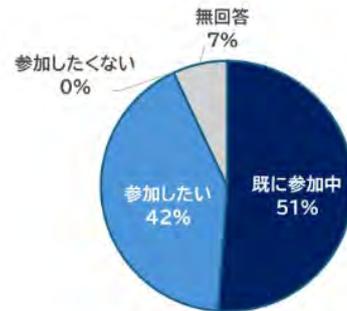
N = 43



図表 つながりづくり活動への参画意欲

問6. つながりづくりの活動に参加してみ  
たいと思ったか

N = 43



自由意見でも、市内に素敵な人・居場所があることを知り心強く思った、何から始めたらいいか分からなかったが背中を押してもらった等の感想が多くあがり、今回のシンポジウムが市内のつながりづくり活動に関心をもち、実際に活動するきっかけとなったといえる。

⑥ つながりサポーター養成講座の開催	
概要	孤独・孤立を予防し、当事者を支援するために日常の中で何ができるのかを学び、「つながりサポーター」養成講座の講師を育成するための講座を開催した。
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後のつながりサポーター養成講座の担い手を育成するために、市職員や社会福祉協議会等を対象に、講師養成の講座を実施した。</li> </ul>
工夫点	<ul style="list-style-type: none"> <li>継続的につながりサポーター養成講座を実施して市内の支援者を増やしていくために、今回はつながりサポーター養成講座の講師を養成することを目的とした。</li> </ul>
結果	<ul style="list-style-type: none"> <li>庁内他部署や社会福祉協議会等、計 22 人が受講した。</li> <li>アンケートの結果、回答者の100%が周囲の困っている人を助けようと思ったと回答した。</li> <li>次年度以降のつながりサポーター養成講座の活用方法の検討が行われた。</li> </ul>

(開催概要)

日時:1月 22 日(水) 17:30~19:00

場所:春日井市総合福祉センター 小ホール

講師:一般社団法人 Shien 代表理事 山田浩史さん

つながりサポーター養成講座の講師を育成することを目的として、春日井市職員や社会福祉協議会等を対象に講座を行った。実際に孤独・孤立当事者の支援活動を行う講師の実体験を交えた講義であり、終了後も今後講師をするにあたっての質問があがった。

図表 当日の様子



(効果検証)

受講者アンケートには 20 名が回答した。「本講座を受講する前と比べて、孤独・孤立に対する理解に変化はありましたか?」という設問と「孤独・孤立の問題について興味・関心は高まりましたか?」という設問には、回答者の 85%が理解できた・高まったと回答した。また、回答者の 100%が周囲に悩みや困りごとを抱えている人がいたら、できる範囲でサポートしようと思うと回答した。

図表 周囲の悩みや困りごとを抱えている人をサポートしようと思うか

質問3 周囲に悩みや困りごとを抱えている人がいたら、できる範囲でサポートしようと思いますか？ (N=20)

